

平成27年度環境カウンセラー研修企画検討等業務 実績報告書



特定非営利活動法人
北海道環境カウンセラー協会

目 次

1. はじめに	3
2. 業務の目的	3
3. 業務の内容	3
(1) 研修の企画・調整及び事前準備	3
(2) 研修当日の運営	6
(3) 研修の開催	6
(4) 事後処理	38
(5) 本業務の総括	38

添付資料

資料 1 配布資料	41
資料 2 情報提供資料 1	42
資料 3 情報提供資料 2	45
資料 4 基調講演資料 1	47
資料 5 基調講演資料 2	53
資料 6 基調講演資料 3	55
資料 7 グループディスカッション資料	57
資料 8 アンケート	60
資料 9 アンケート集計結果	62
資料 5 アンケート（一般向け）	66
資料 6 アンケート（一般向け）集計結果	67

1. はじめに

特定非営利活動法人（以下「NPO 法人」という。）北海道環境カウンセラー協会は、平成27年度環境カウンセラー研修企画検討等業務仕様書（以下「業務仕様書」という。）に基づき、本研修の企画・運営を行った。この報告書は、実施した業務内容を報告するものである。

2. 業務の目的

本業務は、環境保全に関する豊富な知識や経験を持ち、環境保全活動に取り組もうとする市民や事業者の相談に対応するとともに、自ら環境保全活動を実践し、環境パートナーシップづくりをすることを期待される人材（環境カウンセラー）を対象として、環境カウンセラーとしての資質・能力の向上や情報交流による環境カウンセラー間のパートナーシップ形成を図ること等を趣旨として開催する「環境カウンセラー研修」（以下、「研修」という。）について、より効果的に行うための検討、企画、調整等の業務及び、研修を運営することを目的とする。

3. 業務の内容

（1）研修の企画・調整及び事前準備

① 研修プログラムの検討・作成

ア）業務仕様書に基づき、研修会午前の部として、受講者全員（定員 50 名程度）を対象とした基調講演（一般公開する）について検討した。その結果、「持続可能な社会」、「地元との関わり・連携・教育」、「人材育成・後進の育成」、「CSR」、「環境教育」、「生物多様性」、「ネットワーク形成」、「地域活性化」、「連携による地域課題の解決」などのキーワードで、講師候補を複数名選定し、実施計画（案）を作成した。

イ）業務仕様書に基づき、研修会午後の部のグループディスカッションのプログラムを検討し、午前の部の内容をもとに、情報交流によるパートナーシップ形成をより効果的におこなうための実施計画（案）を作成した。

② 講演テーマの設定及び講師依頼

研修の実施計画（案）について、事務所担当者と協議した結果、業務の目的に合致した計画であるとの評価を得、基調講演のテーマについても、事務所担当者と協議の上設定した。選定していた講演候補者に、講演の依頼を行い、快諾していただき、その後、事前の打合せを 1 回行った。

・講師

情報提供等：環境省 北海道地方環境事務所 矢吹育夫氏

基調講演：北の里浜 花のかけはしネットワーク代表 鈴木玲氏

③ 研修会場の確保

研修会場は、参加者の利便性を考慮し、札幌駅前にある公共施設「札幌エルプラザ」2 階の環境研修室を利用することとした。

④ プログラムの確定、資料及びアンケートの作成

講師と会場が確定したのを受け、研修の実施計画（案）と基調講演のテーマをもとに、本プログラムを確定した。（次ページ参照）

研修に使用する資料及びアンケートについては、講演講師及び北海道地方環境事務所と内容を調整し、作成した。

平成27年度環境カウンセラー研修スケジュール（北海道地区）

開催日時：12月13日（日） 10：00～16：45

場 所：札幌市環境プラザ環境研修室（札幌市北区北8西3 札幌エルプラザ2F）

定 員：最大50名

午前 の 部	10:00～10:10 (10 分)	開会・オリエンテーション 主催者挨拶 環境省北海道地方環境事務所 環境対策課 課長 永井 均
	10:10～10:30 (20 分)	環境カウンセラー制度及び情報提供等について 環境省 北海道地方環境事務所 企画係長 矢吹 育夫
	10:30～12:00 (90 分)	基調講演（一般公開） 自然・人がきずなで繋がる里浜復興 北の里浜 花のかけはしネットワーク代表 手稲さと川探検隊局長 鈴木 玲（あきら）様
	12:00～13:00 (60 分)	昼食・休憩
午後 の 部	13:00～16:40 (220 分)	グループディスカッション 基調講演を受けて「環境カウンセラーとして、どう伝え、どう広げる？」 ファシリテーター：NPOファシリテーションきたのわ 溝渕清彦 様 基調講演を基にワールドカフェ形式で小グループに分かれ、グループを変えながら数回、対話、お話をさせていただきます。 対話の中で、環境カウンセラー同士の経験交流・情報共有も進めます。
		休憩（10 分間）
		グループディスカッションの感想（質疑を含めて30分） 出席者各自による発表
		まとめ（10 分）
	16:40～16:45	閉会式（修了証交付）、アンケートの記入等 解散

(2) 研修当日の運営

① 会場の設営、受付事務

会場に必要な機材、資料を搬入し、機材の調整、受付の設置、研修会場の机の並べ替え、資料配付等を行う。また、研修出席者の受付を行い、出席者名簿に基づいて、当日の出席予定者の出欠状況の確認を行った。

② 研修の進行管理等

研修会場での進行管理及び講師接遇を行った。また、研修会終了後、受講者に対してアンケートを実施した。

③ 実績報告書作成のための記録等

研修状況の写真撮影、研修内容の録音、研修教材等資料の収集整理を行った。

(3) 研修の開催

■ 10:00～10:10

開会・オリエンテーション・主催者挨拶

司会

環境省北海道地方環境事務所

環境対策課 企画係長 矢吹 育夫氏

主催者挨拶

環境省北海道地方環境事務所

環境対策課 課長 永井 均氏

本日は平成27年度環境カウンセラー研修にご参加いただき、誠に有難うございます。また、皆様方には、日頃より、カウンセラーとしてそれぞれのご専門を生かしての啓発活動や保全活動にご尽力いただいておりますことに、心より御礼を申し上げます。

さて、先日の11日までパリでCOP21が開かれていたところですが、持続可能な社会の実現に向けて、地球温暖化対策の一層の推進をはじめ、生物多様性の保全や廃棄物の発生抑制などの環境問題への対応が重要であることは言うまでもありません。一方で、今日の我が国においては、急速な少子高齢化の進展、地方の人口減少と東京など大都市圏への人口集中が進んでいるという状況があります。そうした中で、小さな村落から大都市まで、各地域がそれぞれの特性を生かした自立的で持続可能な社会を目指していくことが、重要な課



題となっています。

つまり、環境問題を解決する取組を、地域社会の関連する課題解決や、地域経済の好循環につなげていくことが求められています。昨年11月には「ESDに関するユネスコ世界会議」が日本で開催されておりますが、そうした意味で、環境教育においてはESDの視点を入れること、活動においては様々な主体による協働といったことが求められていると理解しております。

午前の部は、こうした流れにふさわしい基調講演として、「自然・人がきずなで繋がる里浜復興」と題して、北の里浜 花のかけはしネットワーク代表、手稲さと川探検隊局長の鈴木玲様よりご講演をいただきます。午後からは、環境カウンセラーの皆様のみの参加となりますが、ワールドカフェ形式でのグループディスカッションを行っていただきます。他のカウンセラーの方々との情報交換の中で、環境カウンセラーとしてどう伝え、どう広げて行くか、その取組を共有し、今後の活動に活かしていただければ幸いです。

以上、大変簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。

■10:10～10:30【情報提供】

「環境カウンセラー制度及び情報提供等について」

環境省 北海道地方環境事務所

企画係長 矢吹 育夫 様

今回、環境カウンセラーについて初めて聴くという方、今後、環境カウンセラーになりたいという方もいらっしゃると思いますので、環境カウンセラー制度について、お話ししたいと思います。

環境カウンセラーとは

「環境カウンセラー登録制度実施規程(平成8年9月5日環境庁告示第54号)」に基づき、自らの知識や経験を活用して助言等を行う者のうち、一定の要件を満たす者を環境カウンセラーとして「事業者部門」及び「市民部門」に分けて登録し、広く公表することにより、市民や事業者等の環境保全活動の推進に資することを目的とするものである、とされています。

一定の要件とは、以下Ⅰ～Ⅲの全てに該当する者となっています。

- Ⅰ. 環境問題や環境保全に関する基本的な知識を有している者
- Ⅱ. 環境保全活動に関する相当の知見と経験を有している者
- Ⅲ. 上記の知識と経験を活用して、環境カウンセリングを行い得る資質及び能力を有する者

活動内容としては、事業者部門と市民部門に分かれています。事業者部門は、企業や事業者等が取り組む環境保全に関わる事業や環境保全活動等に対して、企業等が抱える問題や課題等について最も望ましい解決に向けて適切な助言等を行うことになっています。主な活動例としては、エコアクション21や環境マネジメントシステムの監査、社内の監査員教育などとなっています。

また、市民部門に関しましては、地域や市民団体、学校等が行う環境保全活動や環境学習等に対して、



問題や課題の解決に向けて適切な助言等を行えるか、地域の環境パートナーシップ形成等、地域における環境保全を牽引することとされています。主な活動例としては、セミナー講師、環境イベント等の企画等、地域の環境保全活動への助言や参加などがあります。

右のグラフが発足当時からの人数の推移です。ピークは、平成 20 年前後です。それ以降、残念ながら減っています。

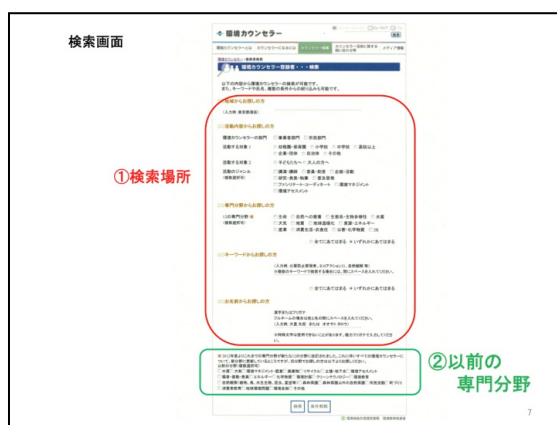
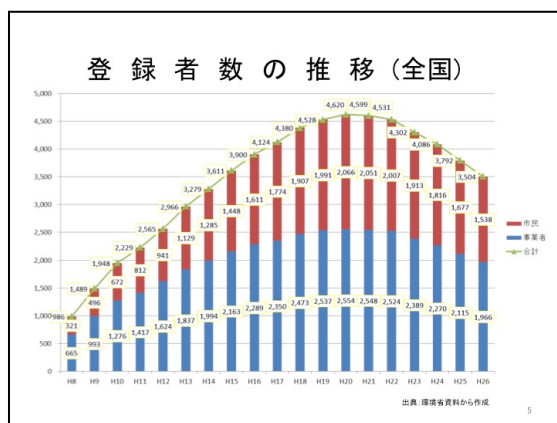
登録して、それですぐに環境カウンセラーの仕事(依頼)が来るというわけではないので、登録してもそのままになってしまっていたり、失効してしまったりということになっている方もいます。それらが、減少の原因だと思います。

環境カウンセラーの探し方

次に、環境カウンセラーのホームページの利用の仕方です。これについては、もう 1 枚、配付しますので、そちらも参考にしてください。

環境カウンセラーを活用されたい方は、環境省本省ホームページで活用したい内容を入力し検索することで、目的に合った環境カウンセラーを探すことが可能です。

具体的な活用方法についてご説明します。まず、環境省のホームページを検索し表示させます。トップページから、総合環境政策を左クリック後、総合環境政策のページの環境教育・パートナーシップの項目を左クリックします。次に、環境カウンセラーの項目にマウスを持ってくるとプルダウンメニューが表示されます。プルダウンメニューからカウンセラー検索を左クリックすると、カウンセラー検索のページが表示されます。



環境カウンセラーを探すには、「地域」「活動内容」「専門分野」「キーワード」などから探すことができます。また、名前もしくは、名字がわかっている場合は、名前で検索することもできます。

環境カウンセラーの活用のしかた

「カウンセラー活用に関する問い合わせ等」を左クリックすると、カウンセラー活用に関する問い合わせ等の入力ページが表示されますので、必要事項を記入して、「送信内容確認」を左クリックし内容確認後、送信を左クリックします。このフォームに入力した内容はパソコン上に残りませんので、どんな内容の問い合わせをいつ行ったのか忘れないため、記載内容を別途コピーで残しておくことをおすすめします。

情報提供として

環境省で取りまとめたESDに関する資料を入口で配付しています。もう一つ、IPCCレポートコミュ

ニケーターの募集も行っていますので、チラシを置いています。現在は、気象予報士や地球温暖化防止活動推進員の方が、IPCCリポートコミュニケーターとして活動されています。これは、地球温暖化に関する第5次報告書や温暖化防止に対する知識を、国民に広めて頂くためのものです。研修を受けて頂いた後、コミュニケーターになっていただきますと、独自のIDやパスワードが発行されて、説明できる資料等にアクセスできるようになります。こういったものも募集しておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

これで、事務所からの説明は終わらせて頂きます。

■ 10:30～12:00 【基調講演】

「自然・人がきずなで繋がる浜里復興」への道のり

北の里浜花のかけはしネットワーク代表、手稲さと川探検隊局長

鈴木玲様

○司会 それでは、これより基調講演に入ります。

今回は、北の里浜花のかけはしネットワーク代表、手稲さと川探検隊局長であります鈴木玲様より、「自然・人がきずなで繋がる浜里復興」への道のりという題目でご講演をいただきます。

それでは、鈴木様、どうぞよろしくお願いいたします。

おはようございます。

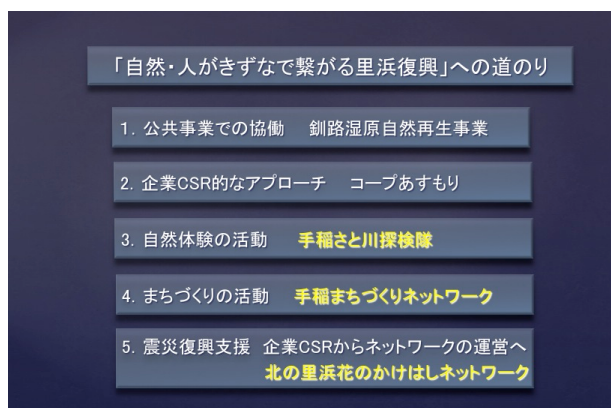
北の里浜花のかけはしネットワークの鈴木と申します。

ちょっと長くなりますけれども、いろいろとお話をしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。大抵は、頼まれると15分とか20分ですごく急ぎ足で話して終わってしまうので、きょうはゆっくりお話ができるということで、大変うれしく思っています。せっかくなので、1時間ぐらいお話をさせていただいて、30分ぐらいで質問をいただいたりしながらお話ができればと思います。



はじめに

北の里浜花のかけはしネットワークというのは、つい水曜日までも、釜石や亘理、名取あたりに行って活動してきましたが、東日本大震災の後、北海道と被災地をつないで、そこに浜辺の砂浜の植物を返していくということを加味して活動しております。その中身について、これから話していきたいと思っております。



研修の事務局の方から、「いろいろなつながりを通して活動している中身」と、「どういうふうに行っているのか」、「何でやっているのか」ということを話してほしいということでしたので、大体このような話をすればいいのかなと思い、五つ挙げてみました。

この話をするに当たって、今までよく考えないで活動していましたが、こういう段階があるのだなということがわかりました。僕は、雪印種苗という会社に3月までいたのですけれども、その中でやった

事業が上の二つです。公共事業の中で、市民とか市民団体などと協働してやるということです。

あとは、配付資料にもあるかもしれませんが、「コープさっぽろ」と森づくりの活動をするというのが、企業の中のCSRで、受注をするというよりは、一緒にやる形をとりました。

それとは別に、市民活動として、手稲さと川探検隊と、今、新たに手稲まちづくりネットワークとい

う形でやっているのですけれども、このまちづくりの活動、そして、雪印種苗にいる間から始めて、今も続けているのですけれども、震災復興です。こういう段階を経てきたのだなと感じています。

ご使用前の注意

- ・私自身が ちゃんと出来て人間ではありません
たくさんの方のチカラを借りて、ようやくです
- ・私自身が こうして出来たとか、よく理解できて
いません。よく「何言ってるのかよくわからんけど、
なんか気持ちは良かった」と言われます
- ・それでも してきたことと想いをまとめてみました
何か役に立つことがあれば、幸いです。

ふざけてはいないのですが、お話しする前に、私と私の取組、今回の気持ちについて、ご理解していただいたほうがいいと思ったので、このように書いています。

まず、ここで話す内容をちゃんとできているわけではないということで、いろいろな人の力を借りて、きょうも来てくださっている方がいらっしゃいますけれども、その方たちの力を借りて、何とかかんとかやっているというものです。今は会社をやめて独

立してやっていますけれども、しっかりと食べられる状態までにはまだいっていません。そういう者が話すということです。

それから、先ほども言いましたけれども、どういうふうに、どうしてそれができたのかということや、どうやればいいのかということがよくわかっていないのです。よくわからないながら考えたことであるということと、言っていることがよくわからないとよく言われます。「よく」がいっぱいついていますが、気持ちは良かったけれども、言っていることの中身があまりわからないと言われたことがあるので、そうならないように一生懸命話したいと思います。そんな感じで受け取っていただければと思います。

ゆうべ、この 20 年を振り返って考えていたのですが、何をしたかということをお話してもあまり伝わらないのかなと感じました。その時に、こういうふうに考えました。こういう人と会って、こう思ったということがあって次のステップに入っていたので、そこをなしに、こういうことをしました、ああいうことをしましたという話をしても、何か伝わらないだろうと思ったのです。その辺を話していくと、人生を語るような話になってしまうので、これを聞かせるのはどうかなと感じるのですが、その辺は我慢していただいて、その時、こういうふうに思って、こういうふうにやってきましたというお話をします。ですから、そういうことがあってこれがあったのか、自分ならこうなのかなというように聞いていただいて、もしお役に立てることが一つでもあれば嬉しく思います。

自己紹介

私は、昭和 39 年の釧路生まれで、その後は小樽の朝里で育っています。小学生時代は朝里にいて、海もあり、山もありで、汽車に乗れば札幌に来られるというところで、たっぷり遊んで育ちました。虫などが友達でしたし、友達と遊ばないと家にいてもつまらないということで育ちました。その後、稚内や函館に住み、北大に行きました。

大学ではワンダーフォーゲル部にいて、山や沢を駆けめぐるっていたのですが、そのころはこんな体型ではなく、すごく動いていました。林学を専攻し、河川改修と水生昆虫の生息環境について卒論を描きましたけれども、子どもの頃から野山を歩き回って

自己紹介	1964年(昭和39年) 釧路生まれ → 小樽 朝里小学校卒業 森で、海で、たっぷり遊んで育つ ひとりっ子
	→ 稚内南中学校 → 函館ラ・サール高校 → 北海道大学 剣道部 → ワンダーフォーゲル部・林学科
	1987年(昭和62年) 雪印種苗(株)就職 緑化造園部 ゴルフ場工事 → 室内緑化 → 東京(屋上緑化) → 岩手 → 1997年～ 札幌(自然植生復元)
	2004年～ 手稲さと川探検隊 2012年～ 手稲まちづくり 2013年～ コミュニティファーム 野良がっこう 2013年～ 北の里浜 花のかけはしネットワーク 2015年 雪印種苗(株)を退社、(一社)手稲まちづくりNT設立
	大切な自然を、生きものたちを守りたい。後世に残したい。 人とのつながりを大事にしたい。一緒に楽しみたい。笑顔が見たい

ましたので、森と川とはとても馴染みがありました。

その後、かなりバブルな時期に雪印種苗（株）に入りました。最初はゴルフ場の工事を担当しました。会社の中で三つも四つもゴルフ場の工事をやっていたのですが、その辺の木をばりばりなぎ倒してというつらいところですが、山を削ってゴルフ場を造っていました。１００人以上の人や下請、孫請、ひ孫請の方々を動かして、よたよたしながら山の中で工事の指揮を執っていましたが、こんなことをしているのかなという気持ちがありました。しかも、殆ど休みもなくやっていました。

その後、事業がだんだん下火になっていく中で、サッポロファクトリーがアトリウムをつくったところから、室内緑化の試験をしながら実施していくことを始めました。その他、東京へ転勤して屋上緑化をやったり、岩手に異動して工事受注の営業に携わったりした後、札幌に戻ってきて、１９９７年から自然植生復元という仕事をスタートしました。

それとは別にボランティアで２００４年から手稲さと川探検隊、２０１２年から手稲のまちづくりの活動に参画して、コミュニティファーム等をしたり、２０１３年に北の里浜花のかけはしネットワーク、そして、２０１５年に雪印種苗をやめて、一般社団法人手稲まちづくりネットワークを設立しました。

子どものころから自然の中で生き物と遊んでいたもので、そういうものを守りたい、後世に残したい、私が子どものころに遊んだいろいろな自然を子どもたちに残したいと考えました。それから、人とのつながりは、いつもよたよたしていて、いろいろな人に助けられてきたので、人とのつながりを大事にして一緒に楽しみたいと考えました。

会社に入ってから、周りの仲間とはある程度一緒に仕事をやれるのですけれども、例えば、公園をつくっても、公園をつくった後は使っている人の顔を見ることも殆どないので、仕事をして、どうもありがたうと喜んでもらえることになかなか出会えないというのが不満でした。

自然植生復元について

せっかく環境カウンセラーの方々がいらっしゃいますので、自然植生復元をしていたころの仕事の中身をちょっと紹介したいと思います。

もともとあった自然を戻すために、現地の植生調査をしたり、タネをとったり、苗を育てたりということをしています。これは今も継続してやっています。今まさに東北の津波跡地でやっているところですが、タネを殻から外したり果肉を除去したりして、そのタネを播いて苗をつくっていきます。



幾つかやった事例ですが、１つ目は石狩湾新港の土砂処分場の緑化の事例です。これは、今の里浜ネットワークにつながっていくのですが、石狩浜の植生復元みたいなことをやりました。２つ目は、茨戸川ですね。そして、札幌ドームです。ちょうどドームをつくった２０００年にビオトープをつくりました。また、恵庭にあるサッポロビールの北海道工場で、ビオトープ、浮島などをやっていますけれども、自生の植物などで覆うということをやりました。函館新道ののり面も自生種でのり面を緑化しました。

これらは、うまくいった事例です。こういうことをこれからどんどんできると思っていたのですが、その後はそれほどできませんでした。

これは、富良野川です。十勝岳の泥流の跡ですけれども、気象条件の厳しい標高 800メートル以上のところが緑化されないということで、タネを採って導入しようと思いました。しかし、タネではなかなか育って定着しないため、苗をつくって入れようということになりました。現地に生育する亜高山帯の苗をうまく育てられるか、苗を現地に定着させられるかという試験を結構長くさせていただきました。実際にいろいろな試験施工をして、1年育てて植えて定着させられる樹種や、2年育てて植えなければ定着しにくい樹種があり、また望ましい植栽密度と樹種割合などを明らかにしていきます。それから、目標設定を微地形ごとに三つに分けなければいけないということがわかり、それぞれにどのように植生導入すべきかを導き出して、実際にこの後の事業でずっと実施されていきました。

そのときに、調査・試験施工している間に、だんだん自然に緑化が進んで、植生導入を始めた頃には半分ぐらいは自然に生えたものが増えていって、緑化が進んでいきました。ですから、僕たちがこんなに一生懸命やった調査や検討の結果が出る頃には緑化対象地は半分以下になってしまっていて、残念なような、自然は強いなと思ったりしました。

公共事業での協働

その頃、公共事業の中で協働するということがだんだん増えてきて、先ほどの函館新道の緑化をするに当たって、地域の学校と一緒にやろうということになりました。この頃は、こうやってできるのではないですか、やりませんかという提案を国交省の北海道開発局さんも北海道土木現業所さんもわりと聞いてくれて、僕らがそれを受注して、小学校に行き苗づくりをして道路の緑化の際に入れるということを6年間させていただきました。

これは、役所が主体です。学校に声をかけていただいて、僕らがそこに行き、こういうふうにやりましょうという話をして進めるというパターンです。特にここでは違和感はなくすんなり進みました。

6年目を過ぎて、これからも学校がやりたいという話をした中で、受注業者である我々は、役所のほうから予算がここで切れるので、ここでストップすると言われました。無理だという中で、学校から何とかならないかという話を受けた時に、外部資金を何とか持ってきたり、地元のNPOに渡してできないかと思ったのですが、そのころはまだ知恵も力もなく、結局、そのまま終わってしまいました。残念です。

その後、釧路湿原の自然再生事業にも関わりました。これも請負とは大分違う感じです。ちょうど自



然再生事業がスタートした時ですが、このときに、環境省と釧路のNPOが協働で森づくりをしようということになりました。これは、湿原が壊れていくのは、周囲にある丘陵地の森がどんどんなくなっていることも十分影響しているという理由から、環境省の方でやるということになりました。

ただ、苗をうまくつくれないと話しているNPOさんを何とかサポートしてくれないかと相談されました。NPOさんと環境省との協働事業ですが、契約上はお金は環境省が出してNPOが受注するというちょっと不思議なものです。いろいろな手続のこととか実施計画とか見積もりとか実施するときにアドバイスや協働しながら実施していくということを、僕らがNPOから受託する形で進めました。

単年度事業の限界

協働での事業は、ある程度でき、小学校で苗づくりをしよう、一緒にやろうという学校があらわれ始めます。最初の時点で、苗をつくるのはいいけれども、この学校は2年後に廃校して統合になるという市内の学校ですが、それに参加したいけれども、2年後にバスを出してくれるのかという話を一番最初の打ち合わせのときにされました。先ほどの函館新道もそうなのですけれども、こちらは、1年1年単年度の請負業者ですから、しかも地元のものでもなく、何ら担保もないという中で、再来年のバス代はどののだと言われても全く返事ができません。持ち帰って環境省さんと話をしました。環境省さんもその予算を出せるかどうかかわからないということでした。NPOさんも、「うん」とは言えないという感じになりました。そんなバス代のことですら困ってしまって、みんなが棚上げしてしまうような状態です。

自分が地元のNPOメンバーであれば、自分の判断で、実施できるよう頑張りますと言えるのですが、その立場ではないので、それができないということがありました。

そういう場合でなくても、苗をつくるということになりますと、やはり2年、3年とかかかって、単年度では終わらないのです。そうすると、来年はどうなるのかということです。翌年役所の担当者が転勤になるかもしれませんし、予算がちゃんととれるかどうかかわからないところもあります。また、請負業者は、特に翌年、その業務を受注できるかどうかかわからないということで、全く責任を負えない状態です。それから、学校は、1年で校長先生や教頭先生などが代わることもありますので、地元のNPOがしっかりとこれはこういうふうに進めますと、環境省はこうしてください、学校はこうしてくださいという形にならないと難しいと感じました。

それから、自然再生協議会をずっと見ていましたけれども、国交省も環境省も林野庁も頑張っているのですが、自分たちのところだけ頑張っているのです。NPOも自分たちの主張をするだけです。本来、協議会がこうあるべきだということをしっかり議論し調整して、各ステークホルダーにこういうことをやるべきと指示していくようにしていかないと、これは難しいと思いました。

今、アメリカなどの事例などをテレビで見ただけですけども、うまくいっているところとして、例えば力のあるNPOがあります。「力のある」という意味は理念・人材・資金力そして信用があって、いろいろステークホルダーが、そのNPOと話を進めていくことが望ましいだろうと認めるというもので、そのようなNPOが、ここでも求められると思います。

今回の復興事業もそうですが、結局、役所の縦割りの予算の中でしか物事が進まないということがあります。これを変えるのは簡単なことではないと思うのですが、ある程度しっかりした組織が上にあるといいますか、みんなに対して発言できるというのが重要で、その辺が今はないことが難しいと思いま

した。

仲間と森や川が、つらい状況を救ってくれた

この頃の冬に、暗い感じになりますが、家族が重い病にかかります。私も精神的にかなりまずい状態になりまして、毎日生きているのがやっとだという感じになりました。

この時は、毎日毎日しんどかったのですけれども、ある大先輩が「この状況では『幹』を伸ばせないだろう、今はしっかり『根』を伸ばしとけ。しっかり根を張っておくと後でそういう時が来たら、幹から枝をどんどん伸ばせるからな」と言っていたので、すごく助けられました。

また、そういう辛い時に救ってくれたのが森や川です。それと芽が出てくる植物でした。ちょうどその頃、ベランダにいろいろな植物の鉢があったのですけれども、その頃は水やりすらできないといひますか、思いつかないような状態だったので、たくさん鉢が転がっていました。春まで放っておいたので、冬の間は大変な状態だったのですが、春に見たら芽が出ていたのです。それは、かなりピカッと日が差すような感覚で、「うわ、すごいな、こんなに放っておいたのに植物の力というのはすごいな」と、とても勇気をもらいました。

こういう仲間たちや子どもたちが、先ほどの大先輩もそうですけれども、励ましてくれるといひますか、そばにいてくれました。

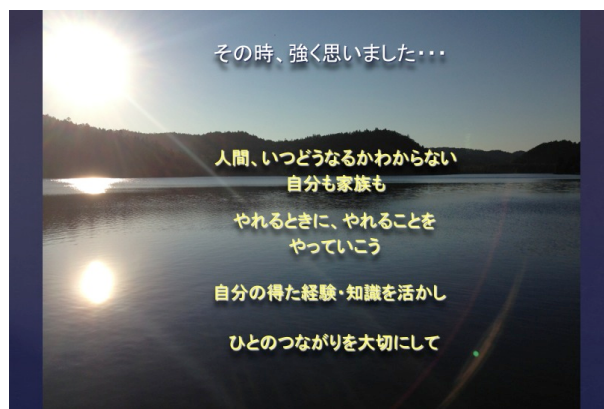
ほかにも森や川によって救われる人がいるに違いないということと、すてきな仲間をつくって、そういうものを守ったり、育てたりしたいと考えました。また、そういうことが自らできるように体験をしてほしいと思いました。



やれる時に、やれることをやろう

そして、強く思ったのは、人間はいつどうなるかわからない、ということ。自分も家族もです。自分も、それまでは元気にやっていたのに、何か急に働けなくなるということがあります。それは、心の問題だったけれども、体もいつ急に具合が悪くなるかわかりません。自分が大丈夫でも家族が急に具合が悪くなる、親が倒れるということだったり、ある時、突然、それまで普通にできると思うことができなくなるということがあります。それは当たり前のことですが、その時強く思いました。やれるときにやっておかなければいけない、やれることをやろうということです。

僕はゴルフ場で仕事をしている時には本当にこんなことをやっていてどうなるのかなと思ってましたし、その後困難もいろいろとありましたが、ありがたいことに自分の得た経験や知識でやりたい仕事ができる場を与えられるようになりました。なので、その経験や知識はぜひ出さなければいけないと思ひ



ました。また、先ほどの大先輩も含めて、いろいろな方に助けられたので、人のつながりを大切にしていきたいと思いました。

自然体験活動、手稲さと川探検隊

手稲さと川探検隊の活動は2004年に始めました。何で始めたかという話ですが、上の子どもがまだ小学生の時に、小学校の子どもたちと先生と一緒にタネ採りをして、苗を育てて植えたりしていました。

自宅近くの中の川という新川に真つすぐに掘って作った川でしたが、ここで何かできないかと思いました。ペットボトルのわなを仕掛けたところ、生きものがたくさん入りました。ちょうど雨が降って増水したので、生きものが避難のために入ったのだと思うのですけれども、2リットルのペットボトルに20匹ぐらいのウキゴリが入って、スジエビも20匹ぐらい、うようよ入っていたのですね。こんなに生きものがいたのだとすごくびっくりしました。

僕は、大学生時代にもこの辺に住んでいて、またその頃戻って住んだのですけれども、こんなに近い川にそんなに生き物がいるなんて全く思ったことがなくて、それまで1度も川に入ることがなかったのですけれども、すごくびっくりしました。

学校でやろうよと言って、学校の校長先生や担任の先生に話をしたら、みんなが「いいね、こんなにいるんだ!」「すごいなあ、いいですねえ」と言うのだけれども、誰も「じゃあ、一緒にやろうよ」とは言わないのです。「学校って何だよ」とぶつぶつ言っていました。ぶつぶつ言っていたら、僕の師匠から、「それなら、おまえがやればいだろう」と言われました。

それまでは、請負業者としてやったとか、NPOがこうだったらいいのになと思ったりとか、他人がどうなのだという話をされていて、自分がやるというのは全然イメージしていなかったのです。その時に、先ほどの話ではないのですけれども、やれるときにやらなければという思いがありました。夏でしたから、どうにかして小学生を集めなければいけないと思いました。

ただ、小学生を集めるにしても、学校は休みだし困ったなと思っていたら、町内会のラジオ体操にたくさん来ているということで、ラジオ体操の場所に行きました。子どもが結構来ているなと思いながら、町内会長さんのところに行って、ここでチラシを配ってもいいですかと聞きました。町内会長さんは、「何のチラシか」と聞くので、「この川には生き物がたくさんいるので、子どもたちに声をかけたいと思うのですが、難しいですか」と聞くと、「100人も来たらどうするんだ?」と言われました。

何人かのお父さんに、こういうことをやりたいのですが、一緒にやりませんかと声をかけて、三、四人に手伝っていただくことで始めることにしました。



ですから、すごく生き物がいる、自分たちで見ているのはもったいない、子どもたちにもさわらせてい、どうしたらいいのかと思って、自分から始めたらと言われて、それでは始めようかなということであって物を考えないで、始めたのです。その時に、先輩に「自分で始めるということを役所などに言ったほうがいいですか」と聞くと、「役所などに言ってもまず役所は『うん』と言わないし、役所が『うん』と言って、役所にあだこうだと言われてやるのは楽しくないぞ」と言われました。その楽しくないイメージがまぎまぎと浮かんだので、やめておこうと思い、役所には行きませんでした。

当時の北海道工業大学（現：北海道科学大学）の柳井先生、今は石川県立大学へ行ってしまいましたが、魚、河川生態のことを教えていらしたので、こういうことをやりたいのですねと話をしたら、今はエコ・動物自然専門学校の講師をしている大塚君という当時4年生の学生が、そういうことを一緒にやりたいらしいぞということで、会をつくることにしました。

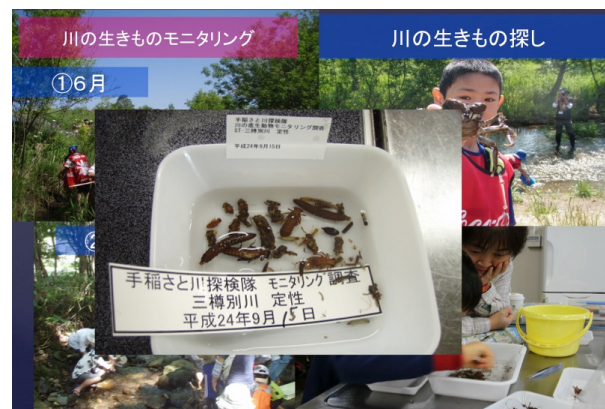
今、会員はだいたい50名です。スタッフ8名はみんな現役の社会人です。学生ボランティアも北大中心に数名います。

こういう自然体験の活動とか、調査、先ほどのモニタリングの作業をしたり、最近はコミュニティファームだとか、アイヌ文化についても学んだりしながらやっています。

多くの親子に身近な自然体験のきっかけを持ってほしいということで、身近なこんなところにもこんなに生き物がいるのだよということと、こうやったらできるということを伝えています。遠くの大自然の中ではなく、身近なところにも自然はけっこうあるのです。自分たちでキャンプに行って、大自然を味わえるような方々はいいいのですが、今まで、そんなことをしたことない、あるいは、自分が子どものころにはやったけれども、子どもをどこに連れて行っていいかわからないという人の何かのきっかけになればと思っています。

月々に1回ぐらい開催しているのですが、嫌になってしまうといけませんので、ある程度スタッフがやりたいということをやろうということをお願いしています。今、話しながら、最近はどうかと不安になりましたが、そういう方針にしています。

写真は星置川での活動です。ここでは、川の生き物をつかまえて、これは何だろうとみんなで見るということをしています。モクズガニのでかいのものです。海に近いこともあると思うのですが、かなりつかまえます。11月には夏に捕まえた



生きものの種類ごとに分類して数を数えます。虫の種類が多いので、楽しいです。

何かで数や種類がガラッと変わったりすることを見逃さないようにということでやっています。しかし橋の耐震補強工事で採石がたくさん川に流されて川底の石が埋まってしまったのですが、つかまえ方の問題かもしれませんが、生物相の変化はよくわかっていません。そういうことも、もう少しわかるようにできればいいなと思っています。

森にタネがどのくらい落ちたかということも毎年4か所でやっています。1㎡の数を数えています。いろいろと変動があるんだとわかります。こんなタネなんだとそれぞれの特徴や散布の工夫を知ることなんかは、子どもたちもオトナもびっくりではないかと思います。最初は、苗づくりをやっていたのですけれども、植えるべき場所があまりないのです。目的もなく苗をつくるのはよくないですね。多少、山口緑地のほうに植えましたが。

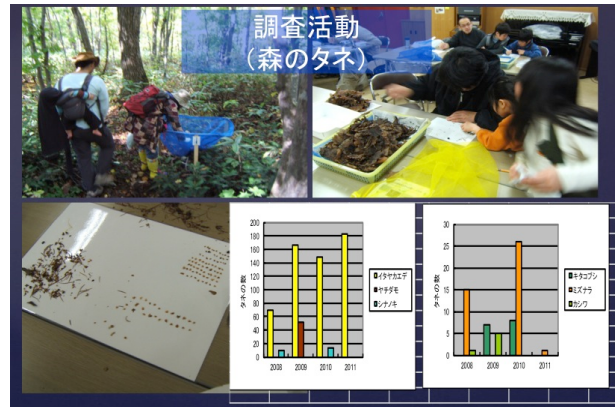
それから、冬はエゾシカの食痕が多く見られます。最近、手稲山でもかなり鹿が多く、被害があります。富丘丸山という山から伸びる尾根があるのですが、そこまでササを刈って道を作って登ると尾根上は3メートル幅くらいの道ができていました。なんと鹿が冬の間に尾根上の笹を全部食べてくれるので糞だらけながらすぐく歩きやすい道になっています。ここに初春にフクジュソウがいっぱい咲いて綺麗です。鹿がそれくらいふえている状態です。

エゾモモンガもいるのですが、最近見つけられないことがちょっと残念です。

こんなふうに、公園の山ではなくて、森の中である程度安全に遊ぶ。僕らが子どものころ、普通に裏山で遊んでたんですけども、自分たちが行かないとなかなかできないので、体験してもらいたいなど。体験すれば、うちのそばのあそこでもできるねというところがそれぞれあるのではないかと思います。

木育活動もしています。西区の方で海外でも人形劇をやっているガウチョスさんという方々がいるのですが、彼らに人形劇を見せてもらって、一緒に森に行って、実とか松ぼっくりとか変わった形の枝とか葉っぱとかいろいろなものをとってきて、自分でマリオネットをつかって一緒にやるというようなワークショップもやっています。この

ように、みんなで一緒にやって楽しんでいる。そして、森のことも知って、こんな遊び方も知るという



ことをみんなでやっています。

これは、コウモリナイト。夜の森を歩きます。歩いて、見えています。コウモリも、どういうものなのかよくわからないのです。

この写真は捕まえて見せているところです。今は捕まえませんが。このときコウモリの絵を先に想像で描いてもらって、終わった後にまた描いてもらうというプログラムをするのですが、前後で全然違うのです。どこに爪があって、手はどうなっているのか、どんな暮らしをしているのか、一晩で700匹も虫を食べるんだよと。そんなに来るのかということが連動したり、こんなものがいっぱいいるのだと、夜に歩くとぞくぞくするのですけれども、こういうことをしています。

カエルの卵は、さわったことがないという子どもがたくさんいて、僕はびっくりしたのですけれども、よく考えたら、カエルが棲める環境が都市にはなかなか残っていない。カエルは森や林で暮らしていて、水たまりに卵を産むので、春の水辺と林が両方セットで存在しなければいけない。また1回壊してしまつて絶滅してしまうと、また環境を再生させてもトンボなら飛んでこられますが、カエルは歩いてこられないので、そこは永遠にそこからいなくなってしまうのです。

結局、そばにそういう場所が全然ないと、そうだよな、カエルの卵をつかむ機会がないよなということで、どこに残っているのか、どこには元々いたけれどもいなくなったのかということをやちゃんと地図に記録に残していかなければいけないということで始めました。

こうして地図の上で、赤い丸はいる場所で青い丸はいなかった場所です。それは、古い地図とか古い航空写真を見てここにはいそうだと想像できる場所を選定する、あるいは、いたよという情報があるところに行って、みんなで調べています。これは、もっと続けていくので、いい場所の情報がありましたら教えていただければと思います。

ほかには、先ほど話にでましたがササを刈って道を作って歩いたり、野ネズミの調査をしたり、いろいろしています。あとは、学校で総合学習のお手伝いをしたり、これは地元の富丘小学校ですが、出かけていってお手伝いをしています。

これは、被災地での北の里浜とのコラボですが、ライブに参加したり、LIGHT UP NIPPON という震災当初から各地で花火を打ち上げているグループと一緒にやっています。



このように自然の中にとると、気持ちがいいなと思います。先ほど言いましたが、僕が一番しんどいときに、自然にとっても癒やされたことがありました。自然には癒やす力があるので、予防といいますか、耐えられなくならないうちに何とかしてくれる力があるのではないかとということで、福祉と連携をいろいろ考える活動もしてきました。リラクゼーションをしたり、介護予防などのところと一緒にしたり、いろいろなことを滝野公園や北大植物園で体験したりしています。

これは、手稲でもやりたいとずっと前から言っているのですが、なかなか実現していません。来年度はやりたいと思っています。

広報・啓蒙活動として展示をしたりもしています。また、去年は「身近ないきものフォーラム」を開催しました。このフォーラムは、活動を始めて10年ぐらいたったので、地域のそういう活動をしている方々ともうちょっと横のつながりを持ちたいということで、みんなで集まっていろいろな話をしています。

これからも横のつながりをちゃんと持っていきたいと思っています。同じ活動をしているという場でたまに会ったりするのですが、お互いに活動に参加したり、一緒に活動するということができそうでできないのですね。その辺をより多くの人に体験してもらうというのは、僕たちのスキルアップのためにも大事ななと思っています。

このような活動を通して、実際に命のすばらしさとか、仲間と協力して楽しむとか・・・、親も子もできるようになってきたと言われ、それはとっても嬉しいことです。

まちづくりの活動 手稲まちづくりネットワーク

それから、手稲さと川探検隊ではこのような体験活動を、月に1回、30人ぐらいの参加者でしかできないので、日常的にできるようにするためには、いろいろな人に伝えるということと安全で楽しいフィールドを開拓するということが必要ですね。毎日使える場所となると、近くでなければいけないので、そういうフィールドがあって、そこに子どもを見守れるような人の配置ができればいいなと思っています。いろいろな方に関わってもらえれば良いなと思います。もっといろいろな見守れる人を増やしていきたいですし、夢ですがフィールドを持ってしまえば良いなと思います。

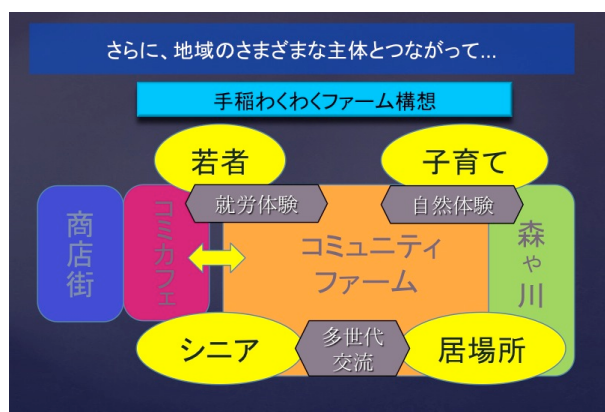
そしてやりたいことをやろうよと言っていると、畑を作って採れた野菜をちゃんと食べたいねと話すようになりました。そうするとコミュニティファームを近所でやっている人たちに会って、一緒にやりましょうという話になりました。手稲の前田森林公園の中にあるコミュニティファーム「野良がっこう」というのですが、北海道科学大学の碓山先生とゼミ学生、近隣の方や福祉施設の方などがメンバ



一で、毎週土曜日の午前に集まって農作業をして収穫しています。メンバーの手稲あすなろ保育園さんと一緒に収穫祭などもしています。

地域のいろいろな方々がいる中で、僕は森や川で遊んでいて、またコミュニティファームを通して違うタイプの方々と繋がって、なおかつ食べ物などが絡んでくると更に輪が広がるのではないかと考えております。そこでは、まちづくりの仲間たち、いろいろな世代も違う、生活の時間も違うような人たちとつながっていけるのではないかと考えています。

今、これを「わくわくファーム構想」と名付けて考えています。図のこちら側ですが、まちづくりネットワークの部分、今年の8月から手稲駅南口でコミュニティカフェを始めました。商店街の中にあるので、商店街の方々と絡みながら、コミュニティファームで育てた作物を持ち込んだり、逆にカフェを通してファームをやっているのなら一緒にやりたいという方や、収穫した大豆でやっている味噌づくりワークショップに参加される方とかも絡んでくるとおもしろいと思います。このコミュニティカフェ、「めりめろ」と言うのですが、手稲駅南口で運営しています。ここから、いろいろなつながりが広がっていけばと思っています。



企業 CSR 的なアプローチ コープあすもり

話が戻りますが、コープ未来（あした）の森づくりというチラシが配られていると思います。

これは、生活協同組合コープさっぽろさんと私が当時勤めていた雪印種苗と協働で行っている森づくりの事業です。これはコープの森づくりの事務局をやっている北海道市民環境ネットワーク（きたネット）さんから、雪印種苗も関わらないかと相談されたのが始まりです。この事業は、森づくりをやるの

ですが、今までやっていたのとちょっと違う形でやりたいということでした。森をつくるけれども、人もつくりたいということです。市民の森づくりを進められる人を育てたいということでした。

僕は、会社としてそれに関わってどういうことができるかを考えました。ただ、会社の正式なCSRという形では進めにくいという事情が会社の中にありまして、人件費はある程度いただくという形で、会社の儲けにはならないけれども、企業と企業グループにとってこういうプラスの面がありますとか、こういうところで活かせば良いのではないのでしょうかという話をしました。コープさっぽろと雪印種苗のつながり、コープさっぽろに品物を卸している雪印メグミルクグループとのつながりがありますし、



この事業を通して新しい試みをするので、ここで得られた技術は他で使えますと会社に説明して、了解を得ました。それは、つながりと言えばつながりですが、事業として取り組むメリット、そのメリットを活かすのが僕の仕事だと思って始めました。

実際に事業展開については、実施する前に会社をやめてしまったのですが、後輩が今後進めていくということになります。

またここでは非常におもしろい取り組みを幾つかやっているので紹介します。場所は、道民の森の神居尻地区です。ここは10年分ぐらいの植樹ができるので、2年で5ヘクタールでしょうか、以前開拓して牧草地と使っていたエリアです。そこで、一般公募のワークショップメンバー全員で、どんなふうに森ができたがっているのか、もともとどんな森だったのだらうということ、牧草地を歩きながら、周りの森を見ながら観察しました。

この人は、旭川のNPOもりねっと代表の山本牧さんです。北大ヒグマ研究会のOBで森の動物にとっても詳しくて、何か痕跡などが出てくると、すぐにこういう特徴があるのだと教えてくれます。僕は、森の専門なので、2人で講師をしながら歩きます。このエリアでどのように森をつくっていくか、どういうトレイルをつくったら良いのかとか、この橋にこんな名前をつけようとか、そういうことをワークショップのメンバーと考えて、実際にそれを図面に起こして、翌年に植えるということをしました。

植えるのは植樹祭として、バス5台、300人ぐらいの親子で植える行事を6月初旬に実施するのですが、大人数で子連れ親子も多くて大変ですけども、そういうことを毎年毎年やっています。

人も育てるということで、例えば山本牧さんの所有の森に行って実際に伐る樹木を選んで伐採や搬出などを体験するということもやっています。

このことをやることで次につながっていくということはあると思いますし、そこでいろいろな取り組みを一緒に組み立てていくことは、さまざまな面で新たなものを生み出すきっかけになるのではないかと思います。

震災復興支援 企業 CSR からネットワークの運営へ 北の里浜花のかけはしネットワーク

そうこうしているうちに、2011年3月11日に東日本大震災が起きました。僕らは、どうしたらいいのか、瓦れきを片づけに行けばいいのか、僕たちに何ができるのかわからず、ただ茫然とテレビを眺め、募金くらいしかできずにいました。現地に行くのもいいけれども、毎日仕事があるので行けない。そんな中で、僕らができることは、現地で激しく自然が壊されている、それを元に戻していくということが必要になる時が来る。今すぐではないけれども、僕らの技術を活かしてやるべきときが来るのではないかと、という思いに至りました。が、いても立ってもいられないと言いますか、どうして良いかわからない。でも行ってみるしかない、できれば会社として支援も事業も関わるべきだと思い、何か会社にも説明をしなければいけません。もちろん、企業人として、そこで、多分復興事業として大きなお金が動くから仕事はあるはずだ、何とかそれを受注していくことで業績を伸ばすことができると考えられる、と。そして、その仕事を通して、自分たちで



1. 序章～震災から復旧工事まで

できること、北海道の皆でできることをしていければ良いなと思いました。

とりあえず、仕事があるに違いないからヒアリングしに行きたいと話しまして、それから何度も押しを運ぶことになりました。

という訳で最後、北の里浜花のかけはしネットワークの活動の話になりますけれども、震災から復旧工事、植物のレスキュー活動を始めて、その取り組みをネットワークでできることを考えてスタートしたということについてお話しします。

この写真は、震災から1年ちょっとたった頃ですが、この海辺は、こちらは海側ですけれども、陸の方に瓦れきがまだ山になっていますね。こちらには残った植物が少し見えますけれども、ハマヒルガオが咲いて、ハマエンドウも咲いています。多くの植物がかなりが元気に復活してきていました。震災のその年も結構咲いたようです。

このように、花蜂が戻ってきたり、ハマヒルガオが咲いていたりして、植生もかなり壊されたけれども残っているな、これを使ってもとに戻していくと良いのだなと思っていました。

ここに防潮堤がありますが、その脇のこの部分は手をつけなかった状態です。次の年ですが、こうしてたくさん花がふえてきました。海浜植物は、やはり強いですね。内陸側にかなり入ったところですね。ここから浜が50メートルから100メートルあって、そこから内陸側の方へけっこう距離があるので、もともと生えていた場所よりはかなり内陸側です。こういう湿地がまだ残っていたりしたのですが、今は海岸林盛土の下になってしまいました。この時点で防潮堤は全て復旧ということになっていて、もともとあった位置で防潮堤を高くすることが決定して、国交省が着々と準備を進めていました。

防潮堤の内陸側は、松林があった海岸の保安林なので、林野庁が松林を復旧することになりました。この松林は、松がいっぱい倒れ、流されたものもかなりあったのですが、調査の結果、原因として地下水位が高かったために根っこが深く張っていなかったことがわかったそうです。それで復旧にあたっては轍を踏まずに立派な防災林をつくるために、とにかく土を盛って根をしっかりと張るようにしなければいけない、そういう復旧を行うという絵が描かれました。

僕先輩らも関わっていて、絵を描いた時点では、もちろん実施するときはそこそこの状況に応じて



適切な配慮もするべしであるし、また防潮堤との兼ね合いなど背後の土地利用を考慮して再検討するものだと考えていましたが、一度標準的な断面図などの図面を示すと、真面目な公務員の方々は一生懸命そのとおりにやります。しかも、短期間に大量の仕事をしなければいけない中では、個別にどこをどうしなければいけないかということを考えている余裕が確かにないです。実際にそれは理解できるのですが、それは殆ど取り入れられずに、概ね 2 メートルの高さで山砂で埋めていったので、これらはどんどんなくなっていました。

防潮堤は、線的に作られることもあり、また国交省はかなり自然環境に気を使って施工しました。例えばこの海側のエリアはたくさんの植物が残っていて、貴重なハマボウフウなども残っていたので、工事を陸側からだけやったりとか、事後モニタリングもしっかりやっていて、いろいろな気を使ってくれています。

しかも、線的で幅は広くなく、破壊の程度は大したことではないのですが、海岸林の方は数百メートルという相当の幅で埋めまくっていて、今もどんどん埋めています。確かに、短期間に松林を創生するという目的でやるのにこういうことが必要ということは全否定しませんが、片や、どんどん埋まってしまって、雑草もぼうぼう生えているということは問題です。雑草といいますか、外来種ですね。これなどは、林野庁が最初に植えて冬の季節風で軒並み枯れているクロマツ苗ですけれども、大変残念ながら得ない状態になっています。

そんな状況で地元の人たちと何とかできないかと思っていた頃に、北海道からハマナスを植えに行くボランティアに同行して被災した受入れ団体の方々などを訪ねました。いろいろな人に会っていろいろな話をしますが、生き残った方々で、あの環境を残さなければダメなのだと、自然を守りながら復興しなければいけない、そうしないとまたこういうことが起こるのだと言っている人がたくさんいました。そういう人ばかり集まったわけではないのですが、でも、「もし次に津波が来ても、それが見えるし、今度は全員すぐに逃げるから私たちは大丈夫だから、あんなものはつくらないほうがいい」という人にたくさん会いました。それが全ての意見ではないのですけれども、そう言う人ばかりでした。いずれにしても「海辺の自然をとにかく守る方法はないか。それでは一緒にやろう、北海道の人も手伝ってください」ということで、手を握られたのですけれども、これは何とかしたいと思いました。

また畑でハマボウフウをつくって仮設住宅で暮らす人の仕事にしたいという人のところに呼ばれて、タネ播き等を一緒にやったりということもしました。また、もともとは関上浜の近くに住んでいた方たちの仮設住宅にも呼ばれました。そこは、当たり前ですけれど、ずっと内陸のほうにありました。浜は工事



をどんどんやって、普通の人は全く近づける状態ではないのです。しかし、ここに住んでいる人たちは、生まれたときから波の音を聞いて暮らしていて、いつも浜で遊んでいたというおじいちゃん、おばあちゃんです。この自治会長さんが土木屋さんだったらしく、大型ダンプ 4 台分の海砂を敷地内に運ばれて、やはり閑上でハマボウフウの会を十数年前に立ち上げた大橋さんという方に頼まれて、ハマボウフウはじめ海辺の植物の苗を植えました。みんなに砂をさわらせてあげたいっていうんでね、鈴木さんも手伝ってくださいと言われて、一緒に植えました。

そのようなことで、いろいろな人がいろいろな形でやりたいと言ってくれたり、手伝ってくれるという話があり、とても嬉しかったです。一方僕は仕事で行っていたので、国交省に行ったり、環境省に行ったり、林野庁に行ったり、仙台市役所に行ったりして、復興工事に際して海辺の植生を戻すことができますけどやりませんかと提案してきました。でもまだまだ固いものをどんどん急いで作っている状態なのでとても無理だといわれているうちに、2 年、3 年、4 年とたっていきました。

会社はよく行かせてくれたと思いますが、復興工事の中で自然環境保全等に関わる大学の先生たちや地域の団体の方々と、具体的にできることを考え実行しながら、復興工事関連の官庁などにかなりいろいろな提案をしていきました。しかし、なかなかうまくいきませんでした。

そうこうしているうちに工事は着々と進行していきます。

まず、残された植物が埋められていくのを見ていられないということから、埋められる植物のレスキューをしようということになりました。1 月の寒い中、砂の表面は凍っているような状態なのですが、春になったら埋められてしまうというので、まず掘り出して、春まで別の場所に仮に埋めさせてもらって、春に植栽しました。これは、凍ってなくても大変なので、たいした数を救えないから、復元できる面積も限られます。これは大切な活動けれども成果のわりに大変過ぎるということで、もともとタネを採って苗をつくって戻す業務をしていたので、それでは、タネも採って育苗して植えていこうということになりました。これだと少し時間がかかりますが、現地での労力的にはかなり楽です。

一方、工事はどんどん進行していきます。この工事を発注している役所に行って、こういうふうにしたらどうですかという話をしても、それどころではない訳です。すごい予算を少人数で動かしていますからね。ただ、それでも国交省は慣れているというか、人員もいて技術も意識もあって、先ほどお話ししたようにかなりレベルの高い対応をしていましたが、他の役所ではそれどころではない。

とりあえず、実際につくって見せなければいけないということで、それでは市民の活動としてやろうよということになりました。最初は、現地で、例えば仮設住宅で苗づくりしましょうかと言ったのですが、まだそんなことができる状況でもないということと、北海道に帰ってきて周りの人と話してみると、「もう復興したのではないか」とか、「何かできることがあればやりたいけれども何をしたいかわからない」、「もう瓦れきは片づいたのでしょうか、今さら行っても悪いよね」という感じです。でも、「防災のことなどは学びたいな」という町内会の人などはいっぱいいます。

それでは、何ができるのか。現地でタネを採って苗づくりをして植えに行こうと。僕はそういうことばかりやっていたので、つい苗づくりに頭が行くのですけれども、北海道でつくろうと。北海道でつくろうと思ったら、雪印種苗もそうですし、石狩浜の植物保護センターというものがあって石狩市の施設なのですが、海浜植物の育苗もしています。そこで石狩浜の保護活動をしているグループに友人や先輩がいました。それから花のかけはしネットワークの副代表してくれている北大の松島肇先生は石狩浜の保全に関わっていて、彼らとも石狩浜で活動していたので、彼らとも一緒にできるよねと。昨年から石

の範囲なら問題ないかというのはいろいろと議論があるのですが、とにかくお互いに交じる可能性はなくするため、花を除去するとか、花が咲かないうちに持って行ってしまおうとか、広がらないようにしっかり管理するようにしています。

そして、2014年からタネ播きを始めました。タネ播きをみんなでしました。石狩中学校の2年生ともタネを播いて育てました。これも、蜂が入ってきたり出ていったりしないようにネット掛けしています。

この年は、ウンランなどが結構咲いて、センターの人から花摘みは毎日大変だったよと言われていたので、海浜植物のある海の近くでの育苗は、リスク回避のためにあまりやらないほうがいいなと思いました。

これを北海道で何万鉢もつくって、向こうに運送費をかけていくというつもりはないです。それは、エネルギー的にムダですし、遺伝子かく乱のリスクも拡大するので、これは、向こうに行くひとつの方便といいますか、こういう想いをその花に込めるということと、それを持っていくから一緒に行こうということだったり、持ってきたよというようなことだったり、そういうふうに海辺の花を介して想いを伝えあい、学びあうということですね。

できれば、レスキューという意味もあるので、現地周辺の小学校などにレスキューしておくとか、タネだけでも保管しておく。もしそこで植生が全部壊されてしまったら、その後に何もなくなったらそこに戻すとか、そういうことができるようにということを日常的に担っていくという考えです。

こんなふうに芽が出て、植えかえをしています。このときは、宮城県環境アドバイザーもして一緒に活動している東北学院大学の平吹先生たちが北海道に来てくれて、一緒に作業をしています。

実際に、この年の9月に1カ所、仙台ですが、もう防潮堤が完成したところですが、その防潮堤の海側に皆で植えました。

ここが先ほどお話しした海岸林造成地の2メートルの盛土で、盛土の法面なら植えてもいいよと林野庁が言ってくれたので、ここに植えさせていただきました。翌年はこの盛土上に植えましたが、地元の町内会の人たちと植えました。彼らにかつて先祖や自分たちが海岸に松を植えたことや被災した時のこと、海辺や復興への想いなどいろいろなことを聴いたり、お話をしました。



そして11月にモニタリングしました。ただ、海浜植物は横への広がりが激しく、また砂の移動もあり、あるいは防潮堤まで来る高波が何年かに一遍あって砂ごと流されたりされるので、長く続けられないかもしれませんが、成果は確認していきたいと思います。

そして最初からずっとやりたかったことですが、先ほどの石狩中学校の生徒代表4人を連れて行って、これは地球環境基金とREADY FORというクラウドファンディングでお金を集めて、旅費を賄って、4人全員が女子でしたけれども、先生と名取市に行きました。そして地元の名取ハマボウフウの会の方々と一緒に名取第一中学校の子どもたちも呼んで交流会をしました。閑上の被災の現場の状況を見て、浜に行き行って一緒に苗を植えるという活動をしました。



このときは、ハマボウフウの会の保護地で植栽しました。でもここはけっこう植生が復元しています。こんなふうに復元しているところに植えるのはどうかと思っています。本当は、復元していないところ、復元が難しいところ、例えば防潮堤のコンクリートに砂がたまっているところなんかでやりたかったのです。国交省も理解してくれて、直前には何とかできるという話で途中までいったのですが、結局、ここは宮城県の管理地域なのですが、直轄で国交省が工事をして、工事が終わったら宮城県に返すということになっているので、そういうところで余計なことをされると非常に問題があると上の部局から言われまして、急にオジャンになりました。そういう経緯でここでやっています。

植栽活動のあと、来年に向けて皆でタネ採りもしました。

先ほどから言いますように、盛り土して埋めてしまったところは植物がなくなったところなので、そこに植生を戻したいという気持ちがあります。松林だったところには海浜植生が生えていたので海浜植物を復元したい。ただこの場所は防潮堤の陸側で、しかも防潮堤で海とは分断されてしまった海辺環境とは言いにくい場所なので、そこに海浜植生を植えるべきなのかというのは非常に悩ましいところです。その他にもこれを一緒にやった地元の方々同士の事情もいろいろとあったり、学校の事情があったりで、なかなかすんなりといかないケースが多々発生しました。人のつながりでやるということで、そういうことはどうしても起こるし、非常に重要でおもしろいのですが、やはりそういうことが実は非常にネックになってくるということも往々にしてあります。

そういう中で、何とか出来そうになったところでやっていっています。そのようにやっていった中で、来年は誰々さんの会と、どこそこでこういうことができるねということが新たに生まれてくるということも実際にあります。今、いろいろなところとつながっている状況です。

ただ、工事が終わってから植生を戻すという流れになるので、そういう場面にいつどこがなるのか、そのときに地元の人がどういうふうに動けるのかというのは、それぞれに事情があったり、延びたり早くなったりするので、そこは、市民のつながりで進める難しいところでもあるのですが、いろいろなところと一緒にやっていくことで、どこかここかでそのときにできることをやっていく、うまくつながりを見つけていくということを進めています。

今回行った写真ですが、先ほど言いました黒松内でNPOねおすさんです。3年越しぐらいの時

間を経て実現したのですけれども、現地で採ったハマボウフウのタネから苗を育てて、一緒に植えに行きました。

鵜住居という釜石の北のほうの町です。釜石の湾の二つ北側の湾になりますが、大槌町があります。大槌町というのは、ご存じかと思いますが、庁舎全部が被災しました。町長以下全員が亡くなったのですけれども、この庁舎は、震災遺構となっています。被災の現場をあちこち見せていただいて、そのあと被災海岸の植生調査や保全活動をしている岩手県立大学の島田直明先生による学習会をしました。そして夜には宝来館で交流会を行いました。今回は特に、



震災直後に支援に入ってきた人たちが参加していたのでその時のお話とか、地元の方々から自分たちはこういうふうに復興したいと思って、さまざまな活動を経てここまで戻したという話などいろいろと伺いました。これは、本当に学び合いになると思います。翌日はタネを採った浜の観察と育てた苗の植栽をしました。この浜は防潮堤の復旧工事中なので、今回は海砂のたまっている内陸側の敷地に仮に植えて、今後育てたものを工事完了後に浜に移植するということをします。

1 年前くらいから行政の協力もだんだん得られるようになってきました。ここは石巻の防潮堤工事現場です。もう埋まってしまったのですけれども全面海浜植物に覆われていました。国営祈念公園の予定地に隣接しているのでこれはうまく活用していけるといいなと思っていたところなのですが、ある日通ったら、なんと工事がもう始まっていて植生をブルドーザーで剥がしていました。活動を一緒にしている平吹先生は、宮城県環境アドバイザーという立場にあるので、お話をしたら、すぐに宮城県が対応してくれました。だったらどうやったらいいのか教えてくださいということで、僕が行って植物の根系ごと砂を取り置きして仮植畑をつくってもらうことにしました。タネ採りもさせてもらうことにして、地元の NPO いしのまき環境ネットの人と、たまたま滞在していた EPO 北海道にいた A さんと一緒にタネ採りをしました。地元 NPO の方は、その後、地元小学校でタネ播きをして、苗を育て始めました。そんなに急いでも現場はまだできていないぞという感じですが、すぐに苗づくりをしていました。

先日見に行きましたら、ダンプが仮植畑のすぐ近くに土砂の搬入を始めてしまっていました。また平吹先生に連絡したら、再び県がすぐに対応してくれて、これまたすぐにメールで写真を送ってくれました。

ですから、なかなか敷居の高い役所でも、わかる人にちゃんと説明して、しかるべき人が話をすれば、ある程度のことはやってもらえることがわかりましたし、幾ら言ってもなかなかうまく行かないという組織の事情などもある中で、市民ができることを自らやってみせて、その中で評価してもらって、あるいは行政と組んでやることで、また周りに評価していただいて、少しでもよくしていくということができると思いますし、そういうことをやりながら、被災地とつないで、北海道との交流もできて、なおかつ、浜の自然環境も守られていくといいなと思います。

これは今後も続けていきますので、ご協力をいただければと思います。

新たなネットワークづくりに向けて

これからやりたいことですが、石狩低地帯の自然再生です。

これは、舞鶴遊水地と言いまして、そこに自然再生の可能性を検討する試験フィールドを北大と一緒に確保しました。

ここは、もともと昭和30年ぐらいまでマオイ沼という沼があった場所です。そこが農地になって、その後、遊水地の中に入ってしまうのです。工事の際のボーリングのデータを見ると、このあたりは、この底面の高さぐらいで、樽前A層、300年ぐらい前の層のちょっと上です。

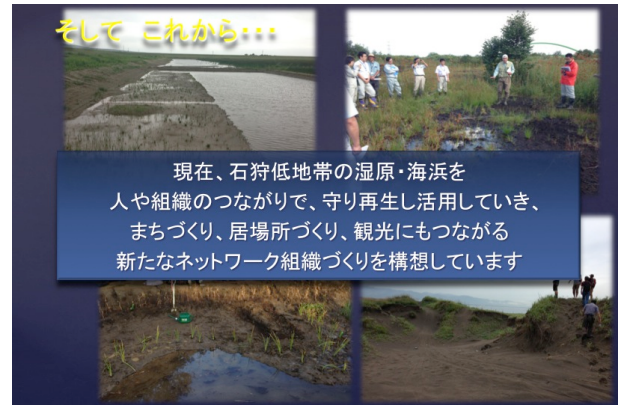
この土も、工事で断面を出してもらって地質のプロの方と一緒に冬場を見て、1000年ぐらい前のところから最近の浅い層にかけてサンプルを採取して、バットに敷き均して温室で発芽させていわゆる埋土種子の発芽実験をしているのですが、こういうことをやったりしています。何百年前の湿原の状態を新たに遊水地の中につくれないかという可能性を検討しています。

こちらは、北海道開発局さんの仕事で、夕張川にある湿原を戻すという事業です。またそこに生えていた植物で地域の特産物づくりができないかということも並行して地元NPOも関わって進めています。

他にもこの地域のいろいろな場所でそれぞれの団体が自然環境保全や再生の活動をしています。例えば、NPO カラカネイトンボを守る会が篠路福移湿原を守るため、頑張って訴訟まで起こしたりしながら何とかトラストして活動してますし、石狩海岸ではいしかり海辺ファンクラブの方々が石狩浜の保全活動をしています。このように石狩低地帯にほとんどなくなってしまった湿原を戻したり、石狩浜を守るということなどをやるに当たって、役所であったり、北大が絡んで事業として研究としてやっていたり、地元のNPOがまた、いろいろな条例をつくってもらったりしながら活動をしたりしているのですが、みんなは、個別に頑張っています。あるいは、行政の縦割りといいますか、地域割りの中でやったりしていて、そういうふう個別にやっているのですが、僕はそれぞれにいろいろ関わっているのですが、最初に釧路湿原自然再生協議会のことを熱くなって話しましたが、ちゃんとみんなをつなぎつつ、ネットワークして、人と組織のつながりで、協力しながら守ったり、再生したり、さらに地域のまちづくりにつなげたり、居場所づくりをしたり、観光にもつながっていくことを進めていける組織もつくっていききたいと構想しています。

まずは手始めに、湿生植物のレスキューを行いつつ、植生の活用をしていこうと思っています。今どきの言葉で言うと生態系サービスですね。例えば、湿原を使って、もともと湿原でつくっていた締め縄をつくるとか、その技術を伝承していくとか、そういう人たちと一緒に多世代交流をしてみるとか、それを観光のワークショップにしてやるとか、そういうことも新たなネットワークでできるといいなと思っています。これもまた、1人でできることではないので、たくさんの人たちと一緒に組んでやっていきたいと考えています。一緒にできることを楽しくやりたいと思っています。

ひとつ良くわかったことは、結局、1人では何もできないということです。特に、僕はちゃんとしたことが全然できないのですが、何かを始めてしまうということは割と好きで得意です。しかし、続けることはかなり不得意なので続けられる人と組むとか、また論理的にうまく話すことも上手じゃないので



上手く説明したり論文にしたりできる人と組むことによって実現できると思っています。

気仙沼でも石巻でもまちづくりのことを実践している人たちと一緒に組む方法を話し合ったりしていますが、今、何かできるのではないかなと思ったら、やりたいと思ったことを自分だけで何とかしようと考えて、それはできないと思うのではなく、あいつと組んだらできそうだとか、一緒にやりましょうというところにつなげて、あとは楽しくやるということが良いのではないかと思います。そしてそれが僕のやりたいことですし、やってきたことです。

全体的にごちゃごちゃしましたが、以上でお話を終わらせていただきたいと思います。

ありがとうございました。(拍手)

○司会

鈴木先生、ありがとうございました。

まだ時間が少しございます。せっかくですので、いろいろとお聞きになりたいことがあれば、ご質問、また、ご意見などがあれば挙手をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

○フロア

今日は、大変貴重なお話を大変ありがとうございました。鈴木さんから、時々は聞いていたのですが、総まとめ的に聞けることで、大変ためになりました。

二つほど質問させていただきます。先ほどの植栽で、植える時に、限られた場所だとは思いますが、1 品種だけをばばばっと持ち込むのではなくて、ある程度ランダムにとか、品種と数と密植のぐあいなどは、もともと環境調査をして似たようにやっているのでしょうか。それとも、とりあえずふやしたものを持ってくるという感じなののでしょうか。

○鈴木

まず、そこに生えているもののほとんどの種類のタネを採って、苗をつくります。苗をつくったときに、たくさんできたり上手く発芽させられなかったりということがありますが、その中で偏りのない形で植えます。植える苗の配分ですが、現地の調査をもとにというほど厳密にはやっていませんが、これはたくさんあるけれども、これはちょっとだねということをもとにおおざっぱに配分しながら、現地に持ち込みます。植え方は、これまでの石狩などでのデータがありますので、大体それに基づいてやります。

先ほどの防潮堤のところでの植栽は、かなりしっかり計画の図を描いて、それに基づいて植え、それをもとにモニタリングしていています。

それから、先ほどレスキューのため仮植ですと言った釜石では、とりあえずそこに植えて後で現地に移植するということをしているので、そこはあまり考えないでほしい 20 センチピッチで列植しています。

○フロア

もう一つです。改めて、防潮堤の砂だまりとか、すき間に入れるということも一つの案であったということを知ったり、これまでの話の中で、盛り土とかスーパー堤防とか、垂直面で大津波をとめようと思っても、どんと来たら壊れるということがありまして、すごく違和感があります。今日の砂丘の石狩浜の事例を聞いたりしますと、むしろ「てんでんこ」も含めて、海拔的な問題であって、垂直的な堤防をがんとつくればいいものではないかと改めて思いました。

今さら、盛り土とかスーパードリフトを壊すわけにはいきませんが、100年単位かもしれませんが、それが自然に覆われてしまって、その上にまた植栽が入るような状況が、そのような未来があれば、それはそれで波打ち際とか、海から山への連続した生物多様性とか、そういうことも夢として見られるのでしょうか。

○鈴木

連続性は一番大事なことでと思っていますし、そのコンクリートのメンテナンスもたいへんで50年ぐらい寿命ともいわれていますので、防潮堤自体を埋めてしまいたいということがあります。それは、国交省に確認したら、自分たちも埋めたいと言っていましたので、それは問題ないと思います。仙台空港のそばで緑の防潮堤と言って防潮堤に土を厚く盛って常緑広葉樹主体で植えていますが、僕はあれでいいとは思わないのですけれども、砂を盛ることは構わないと話です。砂を盛るといっても、今の状態で砂を盛るのは無理だから、その足がかりとなるようなものとして土のうに砂と海浜植物の苗も入れて設置する試験をさせて欲しいとお願いしました。そのときも、オーケーが出たけれどもその後ダメになってしまったのですけれども、今、直轄であればやっても良いという話をしてくれているので、何とか実現すべくできる場所を探しているところです。

どこでできるか探している理由は、直轄の部分は砂浜があまりなくて防潮堤の法尻が消波ブロックあってすぐ海というところもあるくらいです。危ないところなので直轄になっているのです。なので、砂浜の発達した海岸で、防潮堤が宮城県管理になってから宮城県にお願いしてさせてもらうという方法もあるのですが、時間がかかるのと、宮城県がすごく頑ななので難しいとも思いますが、いずれにしても足がかりになる植生を砂ごと設置して、砂がたまっていつか、だんだん埋まってしまうということを目指しています。

それは近々、理解ある仙台国道河川事務所の担当者たちがいる今年度中には、何とか1か所はやっておきたいと画策しています。

○司会 ありがとうございます。

ほかにございますか。

ないようですので、私から一つ。民間企業さんがいろいろとサポートしていただけているのですけれども、民間企業さんは、向こうから来るものなのか、それともこちらのほうから動くのか、民間企業さんとしての何をどうしていいかわからないという情報の問題だと思うのです。その辺で取り組まれていることはございますか。

新たな公共というイメージですが、協働ということで、民間企業さんにサポートを入れるための何かこう作戦みたいなものはありますか。

○鈴木

そこはまだできていないのですが、地元では、かなり実績のあるNPOにどんどん支援が入っている状況があります。ですから、僕らの打ち出し方で、そういうことができるかと思っています。

打ち出し方で一番いいのは、例えば名取にサッポロビール工場がありまして、北海道にもあると。ニッカも宮城にありますから、そういうところをお願いに行こうよと言っています。とはいえ言うだけでまだ行っていない状態なので、ここにいらっしゃる方で、あそこがいいのではないかとか、俺が話してやるという方がいらっしゃいましたら、大金が必要なわけではないので、ぜひお願いしたいと思います。

○司会

環境カウンセラーということで事業者とのつながりがありますので、今、内部だけの話ではなくて、こういう社会貢献も含めて、何かアドバイスができるような場面があれば、ぜひお伺いしたいと思います。

○鈴木 はい。

○司会 何かほかにございませんか。

それでは、そろそろ時間がいいところですので、どうもありがとうございました。

改めて拍手をお願いします。(拍手)

■ 13:00～16:30 【グループディスカッション】

基調講演を受けて「環境カウンセラー」として、どう伝え、どう広げる？」

ファシリテーター NPO ファシリテーション きたのわ 溝渕清彦様

グループディスカッションは、1 テーブル 4～5 人の、ワールドカフェスタイルで実施され、3 回のテーブル移動を通して、意見・情報交換が行われ、各自の学びを深めました。タイムテーブルと内容は、下記の通りです。



13:00～13:20 オリエンテーション

(傾聴のアクティビティ/
自己紹介の記入)

13:20～ ワールドカフェ (5 テーブル)

13:25～14:05 ラウンド 1 (40 分)

「今日の講演を聞いてあなたが思ったことや気づいたことは、どんなことですか？」

14:10～14:50 ラウンド 2 (40 分)

「講演や第 1 ラウンドを経てあなたが気づいたことや考えたことは、どんなことですか？」

14:50～15:00 休憩

15:05～15:40 ラウンド 3 (35 分)

「今日、考えたことや学んだことを今後の環境カウンセラーの活動にどのように生かしていきますか？」

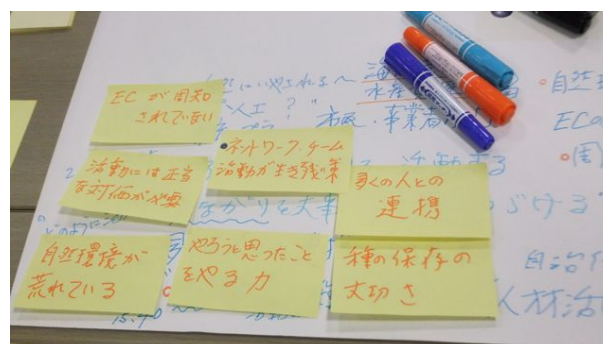
15:40～ ハーベスト (50 分)

15:40～16:10 ・個人記載、選択、
グループ共有

16:10～16:15 ・ギャラリーウォーク

16:15～16:30 ・会場全体で共有

16:30 終了



会場全体で共有

それぞれのグループで話し合われた内容の発表が行われた。以下に要旨を記載する。

○グループ 1

午前中の鈴木氏の話を受けて、一人で活動しているカウンセラーが多いので、カウンセラーの役割について自問自答していると思われる。その中でも他のカウンセラーはそれぞれ専門家として認識でき、この人たちとで連携をすることが大きな力になると考える。

そのためには何が必要かと考えると、

- ・拠点が必要であり、事務局がいて、専門家のリストを持っている必要がある。
- ・ボランティアでの活動が多いが、旅費程度は実費でもらわないとじり貧となる。
- ・環境教育でも子供を対象にしているだけではなく、大人も対象として考える必要があり、それにより、大人が子供に教育が可能となる。

そして、もう一度原点に立ち戻って個人のやる気を取り戻したら良いのではないかな。



○グループ 2

環境カウンセラーは技術者でもあるので、他者との交流や自己研さんなど自覚を持った行動が大切である。そして、環境省からの発注業務で環境カウンセラーを活用(指名要件や照査技術者の条件など)し、大手コンサルタント企業へ偏らないような仕組みがあっても良いのではないかな。一方、環境カウンセラー登録者減少の原因を解析し(受験者が減少しているのか、登録者が登録を止めているのかなど)、環境カウンセラーと環境省が相互に認識する必要があるのではないかな。そして、その対策を打ち出してもらいたい、また、環境カウンセラーから対策案を出ことも必要だと考える。



○グループ 3



市民部門と事業者部門の役割として、市民部門は子供たちの将来を考えることができるが、事業者部門は1～2年の短期間のことが対象になることが多い。主に事業者部門では民間コンサルタント企業との違い(コストパフォーマンスの良いところ)を前面に出すことが必要ではないかな。ただし、きちんと対価を求めることが重要であり、そのために適切な単価の設定を行う必要がある。そして、このような活動のためには拠点が必要である。また、市民部門では依頼事項に対してはすぐに対応できているようであるが、

事業者部門では専門性がありすぐに対応できないこともあるので、環境カウンセラーの連携が重要である。

現在の会員減から環境カウンセラーは絶滅危惧種となるではないか。環境カウンセラーとしての専門家が不足することを防ぐために、さらに若い人を増やすために試験制度の変更や需要のある専門家の採用により、弁護士などの職種と同様に社会的地位を高めていく必要がある。

○グループ 4

午前中の鈴木氏の講演より、多くの人との連携やネットワークの重要性を再認識した。また、11 月に行われた環境カウンセラー制度に対する協議内容を吉迫会長より聞くことができたのは良かった。

(吉迫会長より)現在、環境カウンセラー連合会から環境省への要望として取りまとめ中であるが、以下のことを含めて 10 項目を北海道からの要望として全国連絡会に伝えている。

- ・環境カウンセラー試験の面接試験が現在全国 2 か所でしか実施されていないところを北海道でも実施できるようにすること。それにより、北海道の各自治体に一人程度登録者がいるようにしたい。
- ・面接試験日を土日にしてもらうこと。
- ・ボランティアではなく、活動対価としての時間単価を設定すること。



○グループ 5



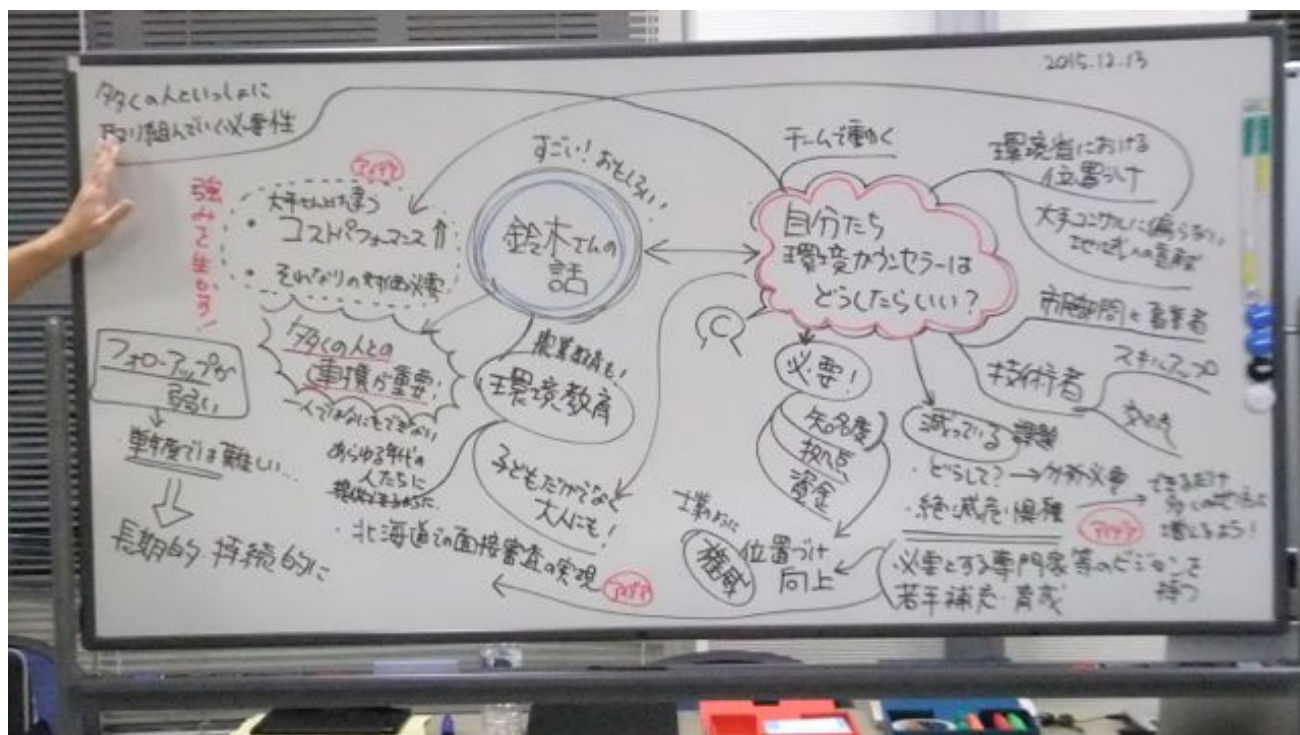
環境カウンセラー各自の強みを活かした連携の重要性が認識されている。また、環境教育については、子供たちだけではなく大人への教育を含めて、あらゆる年代への提供が必要である。そのための方策は難しく、今後も考えていく必要がある。さらに、環境教育だけではなく農業教育なども進めていく必要があるのではないかな。

また、各種の事業・取組みは自治体や団体が音頭を取って実施されるが、それらのフォローアップや評価があまり行われていないと思われる、これらには時間がかかるが必要だと考える。フォローアップとは、単年度で終わる事業ではなく、予算的に継続して活動を実施していくことや事業結果を継続的に長い目で評価していくことである。予算措置などにも課題があるかもしれない。

○その他

- ・鈴木氏の講演から、連携の重要性を再認識した。
- ・環境カウンセラーの専門性(市民部門、事業者部門とも)を強みとして活かしていくこと、そして各自がパフォーマンスを高めていくこと、そのために対価を求めていくこと。
- ・会員減の原因説明は必要であるが、現在、その対応策(全国連合会として環境省に要望する)を検討中である。

グループ発表を、ファシリテーターの溝渕清彦さんに、ホワイトボードにまとめていただいた。



■16:30-16:45 閉会式、アンケートの記載、修了証交付

修了証交付

司会

環境省北海道地方環境事務所 環境対策課 企画係長 矢吹 育夫氏

修了証交付

環境省北海道地方環境事務所 環境対策課 課長 永井 均氏

本日の研修が大変活発に進行し良い成果があった。また明日からのカウンセラー活動に本日取得されたものを活かしてくだされば幸いですと、挨拶の後修了証の交付がされた。

本年度の全課程修了者は19名であった。



(4) 事後処理

① アンケートの回収・とりまとめ・集計結果の報告

研修時に実施するアンケートの回収、とりまとめを行い、集計結果を事務所に報告する。

② 講師への旅費、諸謝金の支払い

研修実施に伴い発生する講師の旅費、諸謝金等の支払い事務を行う。

③ 実績報告書の作成

研修終了後、研修プログラムの内容及び、受講者アンケートの結果を含め、担当者和その記載内容を調整した上、実績報告書を作成した。また、実績報告書の内容については、北海道地区で登録されているカウンセラーに対して周知する予定である。

(5) 本業務の総括

以上、業務仕様書に基づき、平成27年度環境カウンセラー研修企画検討等業務を実施したところであるが、当協会において本研修実施に係る総括を次の通り取りまとめた。本研修の次年度以降の実施に当たり、参考になれば幸いである。

1) 基調講演は、北の里浜 花のかけはしネットワーク代表で手稲さと川探検隊長の鈴木玲氏に依頼した。これは、昨年の検討委員会で出された「研究者よりも、知識を持ち、なおかつ実践もしている方の話の方が、得るところが多い。」との意見を参考に、当協会で検討の場を持ち、「持続可能な社会」、「CSR」、「企業でできること」、「民間だからできること」、「環境教育」、「生物多様性」、「ネットワーク形成」、「地域活性化」のキーワードをもとに選定したものである。

基調講演については、88%が「得るものがあった」と回答があり、82%が「十分参考になった」と回答しており、さらに、一般参加者の85%が「発見や得ることがあった。」と回答していることから、大変好評であったと言える。

(2) グループディスカッションについては、カウンセラー活動の情報交換の場であり本年も活発な意見交換がされた。ワールドカフェのスタイルについては、「毎年やっているので、飽きるかと思っていたが、全く飽きることがない。これは、札幌の研修の特徴として継続して行くと良い。」「毎年、他府県からの参加者があるが、その方達からの評価も大変高い。」等の感想があり、来年も同様のプログラムを望む声が多かった。ただし、各テーブルで、それぞれの活動交流も行えるようにという目的が、参加者には十分に伝わっていないという点は反省点であり、次回以降は配慮した運営とすることが望ましいということだった。

また、参加者によっては、一人で長時間話すケースがあるので、砂時計を利用するなど、円滑な進行を促すような工夫も提案された。

4) 来年度のテーマ、プログラムについて

・環境カウンセラーは、一番身近な地方自治体や市町村との関係が薄いことから、今後は地方自治体と連系を図ることを研修にも生かす必要がある。

- ・地球温暖化対策特にCO2 排出削減は大きな課題であり、環境カウンセラーとしてより積極的に関わっていく必要がある。
- ・環境カウンセラーは環境省の審査・登録制度であるが、地域における認知度が低く活動の場が少ないと感じている者が多く、研修を通じて工夫することが望まれる。
- ・本年も一般の参加者が14 名と比較的多かった、今後も一般参加者が期待するテーマについても検討する必要がある。 _

平成27年度環境カウンセラー研修 添付資料

資料 1-配付資料

平成 27 年度環境カウンセラー研修スケジュール(北海道地区)

開催日時 : 12 月 13 日(日) 10:00~16:45
 場 所 : 札幌市環境プラザ 環境研修室 (札幌市北区北 8 西 3 札幌エルプラザ 2 F)
 定 員 : 最大 50 名

午前 の 部	10:00~10:10 (10 分)	開会・オリエンテーション 主催者挨拶 環境省北海道地方環境事務所 環境対策課 課長 永井 均
	10:10~10:30 (20 分)	環境カウンセラー制度及び情報提供等について 環境省 北海道地方環境事務所 企画係長 矢吹 育夫
	10:30~12:00 (90 分)	基調講演(一般公開) 自然・人がきずなで繋がる里浜復興 北の里浜 花のかけはしネットワーク代表、手稲さと川探検隊局長 代表 鈴木 玲 様
	12:00~13:00 (60 分)	昼食・休憩
午後 の 部	13:00~16:40 (220 分)	グループディスカッション 基調講演を受けて「環境カウンセラーとして、どう伝え、どう広げる？」 (仮) ファシリテーター NPO ファシリテーションきたのわ 溝渕清彦 基調講演を基にワールドカフェ形式で小グループに分かれ、グループを変えなが ら数回、対話、お話をさせていただきます。 対話の中で、環境カウンセラー同士の経験交流・情報共有も進めます。
		休憩(5 分間)
		グループディスカッションの感想(質疑を含めて 30 分) 出席者各自による発表
		まとめ(10 分)
	16:40~16:45	閉会式<修了証交付>、アンケートの記入等 解散

※環境カウンセラーの方は、午前・午後の部の一つでも受講されない場合は、終了要件は、満たし
 ませんので御注意下さい。

環境カウンセラーの利用について

環境カウンセラーの制度説明

環境カウンセラーとは、自らの知識や経験を活用して助言等を行う者のうち、一定の要件を満たす者を環境カウンセラーとして「事業者部門」及び「市民部門」に分けて登録し、広く公表することにより、市民や事業者等の環境保全活動の推進に資することを目的とするものである。

なお、この制度は、人材登録制度であり、国家資格ではありません。また、環境カウンセラー登録をした者に活動の場を保証するものではありません。

部門別の内容

事業者部門：企業や事業者が取り組む環境保全に関する事業や環境保全活動等に対して、企業等が抱える問題や課題等について最も望ましい解決に向けて適切な助言等を行います。

＜主な活動例＞ エコアクション 21 や環境マネジメントシステムの監査、社内の監査員教育など。

市民部門：地域や市民団体、学校等が行う環境保全活動や環境学習等に対し、問題や課題の解決に向けて適切な助言等を行うほか、地域の環境パートナーシップ形成等、地域における環境保全を牽引します。

＜主な活動例＞ セミナー講師、環境イベント等の企画等、地域の環境保全活動への助言や参加など。

環境カウンセラーを活用されたい方は、環境省本省ホームページで活用したい内容を入力し検索させることで、目的に合った環境カウンセラーを探すことが可能です。

具体的な活用について

環境省のホームページを検索し表示させる。

トップページから、総合環境政策を左クリックする。

✕ 総合環境政策のページの環境教育・パートナーシップの項目を左クリックする。

✕ 環境カウンセラーの項目にマウスを持ってくるとプルダウンメニューが表示される。

✕ プルダウンメニューからカウンセラー検索を左クリックする。

✕ カウンセラー検索のページが表示される。

目的別の検索方法

- **地域から探す**（住んでいる地域や活動を行う場所でカウンセラーを探す場合）
「地域からお探しの方」に地域名を入力し検索を左クリックします。
（入力例：北海道札幌市）
- **活動内容から探す**（検索条件を設定して利用する方の活動にあったカウンセラーを探す場合）
「活動内容からお探しの方」に検索条件として部門別、活動場所の設定、活動対象の設定、活動ジャンルの設定（複数選択可）を行い検索を左クリックします。
- **専門分野から探す**（12 の専門分野から活動にあったカウンセラーを探す場合）
「専門分野からお探しの方」に 12 分野の専門から選択した後、「全てにあてはまる」、「いずれかにあてはまる」にチェックを入れて検索する。
なお、専門分野については、以前 22 分野に分かれていたものを 12 分野に統合整理したため、以前の分類でも検索できるよう環境カウンセラー検索ページの最後に分類を掲載しているためそちらでも検索が出来ます。
- **キーワードから探す**（キーワードを入れて検索する。）
「キーワードからお探しの方」にキーワードを入力し、キーワードの入力後、「全てにあてはまる」、「いずれかにあてはまる」にチェックを入れて検索する。
複数のキーワードを検索する場合は、間にスペースを入れます。
（入力例：公害防止管理員 自然観察）

- **名前から探す**（環境カウンセラーの名前もしくは、名字等がわかっている場合）
「お名前からお探しの方」に名前や名字の一部を入力し検索します。
なお、特殊文字は使用できないことがあります。入力フリガナが便利です。
 - **環境カウンセラーを活用するには！**
「カウンセラー活用に関する問い合わせ等」を左クリックすると、カウンセラー活用に関する問い合わせ等の入力ページが表示されますので、必要事項を記入して、「送信内容確認」を左クリックし内容確認後、送信を左クリックします。
- ※ このフォームに入力した内容はパソコン上に残りませんので、どんな内容の問い合わせをいつ行ったのか忘れないため、記載内容を別途コピーで残しておくことをおすすめします。

資料 3-情報提供資料 2

環境カウンセラー登録制度と 利用について

北海道地方環境事務所
環境対策課

環境カウンセラー登録制度とは

「環境カウンセラー登録制度実施規程(平成8年9月5日環境庁告示第54号)」に基づき、自らの知識や経験を活用して助言等を行う者のうち、一定の要件を満たす者を環境カウンセラーとして「事業者部門」及び「市民部門」に分けて登録し、広く公表することにより、市民や事業者等の環境保全活動の推進に資することを目的とするものである。

【一定の要件】

- 以下Ⅰ.～Ⅲ.の全てに該当する者
- Ⅰ. 環境問題や環境保全に関する基本的な知識を有している者
 - Ⅱ. 環境保全活動に関する相当の知見と経験を有している者
 - Ⅲ. 上記の知識と経験を活用して、環境カウンセリングを行い得る資質及び能力を有する者

【活動内容】

事業者部門：

企業や事業者等が取り組む環境保全に関わる事業や環境保全活動等に対して、企業等が抱える問題や課題等について最も望ましい解決に向けて適切な助言等を行う。

市民部門：

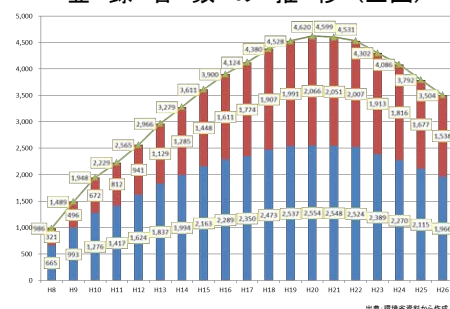
地域や市民団体、学校等が行う環境保全活動や環境学習等に対して、問題や課題の解決に向けて適切な助言等を行うほか、地域の環境パートナーシップ形成等、地域における環境保全を牽引する。

登録者数の推移(全国)

年度	事業者部門	市民部門	合計
1996 H8	665	321	986
1997 H9	993	496	1,489
1998 H10	1,276	672	1,948
1999 H11	1,417	812	2,229
2000 H12	1,624	941	2,565
2001 H13	1,837	1,129	2,966
2002 H14	1,994	1,285	3,279
2003 H15	2,163	1,448	3,611
2004 H16	2,289	1,611	3,900
2005 H17	2,350	1,774	4,124
2006 H18	2,473	1,907	4,380
2007 H19	2,537	1,991	4,528
2008 H20	2,554	2,066	4,620
2009 H21	2,548	2,051	4,599
2010 H22	2,524	2,007	4,531
2011 H23	2,389	1,913	4,302
2012 H24	2,270	1,816	4,086
2013 H25	2,115	1,677	3,792
2014 H26	1,966	1,538	3,504

出典：環境省資料から作成

登録者数の推移(全国)



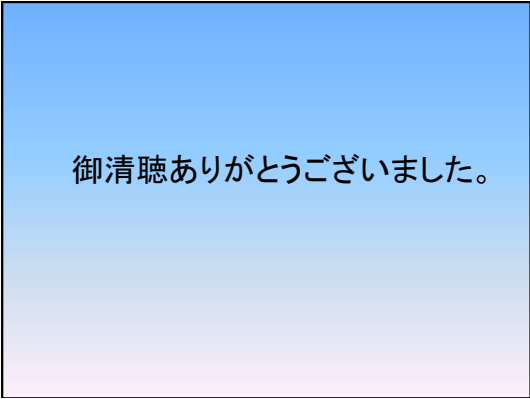
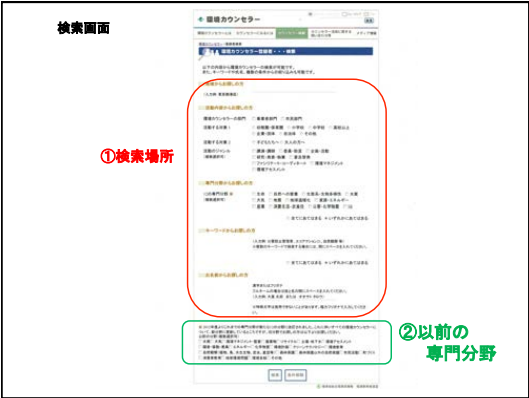
ホームページの利用方法

1. 環境カウンセラーの検索方法

① 検索順について

- ・『地域からお探しの方』
- ・『活動内容からお探しの方』
- ・『専門分野からお探しの方』
- ・『キーワードからお探しの方』
- ・『お名前からお探しの方』

② 専門分野は12分野に分かれていますが、12分野にまとめる以前の分類を下部に記載し検索できるようにしております。





写真提供：小寺 卓矢（P21、右上の1点/P23、3点すべて/P24、中央・木村・花岡の3点/P25、河村・調査風景の2点）

コープの森づくりで つくってきたもの

春遅い高地とはいえ、日差しはなかなかのもの。2015年の6月7日も、当別町の道民の森神居尻地区「コープの森」には、親子連れをはじめとしてたくさんの組合員さんが植樹に集まってくれました。こうした森づくりの風景も、もう8年目を迎えます。

コープ未来の森づくり基金は、道内14の地域で協定を結び、森づくりを行っています。それは、いわゆる森づくりと聞いて真っ先に思い浮かぶ「植樹」はもちろんのこと、実際には植樹よりも大切な、大変な作業である「育樹」までも含めた、息の長い森づくりです。人が手をかけた森は、手をかけ続けてやらないと育たない。下草を刈り、除伐・間伐など手間のかかる作業を経て、森は育っていくのです。だから、コープの森は植樹だけでは終わらず、植樹から年数を経た現在も、あすもリサポーターさんたちが植えた木々を見守っています。

もうひとつ、森はつくるだけじゃない。森と長くつきあっていく上で、森とどう向き合うか。つまり、森と楽しく過ごそう、と

いうこと。森づくりで森や木と接する上で、森の生き物や、山菜やきのこなどの恵み、それからクラフトの素材やエネルギーとしての木。

そうした森が持っている人とのつながりを深めることで、森と人の未来を描いていくことも、大切な森づくりの側面として注目してきました。

森の多様な面を知り、楽しむ活動は、木育や各地区でのふれあい企画でも取り上げられています。

さらに、コープの森づくりの特徴といえば、市民による森づくりを実践していること。植樹といえば主催者が決めた木を植えることが一般的。けれども、コープの森づくりでは、植樹の参加者自身が時間をかけて森づくりを学び、未来の森をデザインし、植樹の実施に関わっています。

こうした森と人とのつながりをつくり、深めることが、コープの森づくりが8年つくり続けてきた風景でもあるのです。



わたしが
大きくなるころには
きっとこの木も
大きくなってるね

2015年コープの森 植樹実績一覧

	実施日	植樹木	本数
道民の森	6月7日	トドマツ	1000本
美幌町	6月20日	カラマツ	400本
白糠町	5月31日	トドマツ	400本
真狩村	5月16日	カラマツ他	80本
鷹栖町	6月20日	トドマツ、ミズナラなど	400本
むかわ町	5月16日	カラマツ	600本
洞爺湖町	5月23日	トドマツ、クリ	405本
新得町	5月24日	カラマツ	300本
喜茂別町	6月13日	オナカマド、エゾヤマザクラ	160本
栗山町	5月16日	トドマツ	420本
合計			4165本

道民の森 2010～2015 コープの森の変遷



2010
撮影



2011
撮影



2013
撮影



植えるだけじゃない。育てることが森づくりはとても大切と、あすもリサポーターさん。

雪の重みをはね返して、ミズナラも元気に育っています。成長の早いシラカバはもう3～4mに、もうすぐ「森」です！



2015
撮影



asumori-report

Report

森をつくる 人づくり ～Fの森のものがたり～



Fの森は、植樹会場ではありません。

その土地が持つ「元の森に戻りたい」という
静かな声に耳をすませ、自然と人との共同作業によって、
豊かで多様性の高い森を育てようとしています。

どんな木を植えればいいのか。小さな苗木がどう育つか。
自然に飛んできたタネは、どんな木になるのか。
「森に戻る力」を信頼し、大事にしながら、木々がいたんだり、
復活する様子にも学んで、あしたの森を夢見ているのです。

ワークショップ講師
山本 牧
NPO法人もりねっと北海道



プロローグ 最初の年はとにかく 歩きまわった。

活動開始は、2012年。植栽を始める前の
まる1年、あすもりサポーターから有志を
募り、6回のワークショップで現地に通い、
このFゾーンにどんな土や草木や水がある
のかを確かめました。

歩く前は単調な草原(元は牧草地)と思
っていたのですが、ヤチダモやクルミの若
木が自生し、湿地もありました。牧草の下
にカタクリが生き残っていて、みんなで「よ
く頑張ったね」と声をかけました。

歩いたルートを図に書き込み、お気に入り
の地名をつけていくと、「地図なんて読



ひたすら
Fの森を歩く。

めないよ」と言っていた人が、どんどん先
頭を歩くようになりました。眺めがいいの
は「あすもりテラス」、小川に土管が埋めて
あった「ドッカン橋」、イトンボを見つた
「トンボ沢」。だだっ広い草原が生き生き
とした表情を見せてくれたのです。

たまたま区画名が「F」だったので、ファ
ミリー、未来(future)、親しみ(friendly)
など、いろんな意味を込めて「Fの森」と名
前が決まりました。

2年目 モザイク植栽に挑戦！

最初の植栽は小さなブロックに分けた「モ
ザイク植栽」でした。木の種類はなんと21
種類！0.5ha
に1000本、
およそ10×
15mの区画
ごとに、ナナ
カマドやカ
ツラ、イタヤ



地図を実ながら森をデザイン。

カエデなどの広葉樹の苗木を植えました。
自然の森ではいろんな樹種が混じり、隣り
合っていますが、手入れのことを考え、ブ
ロック単位で真似してみました。

Fの森は庭園ではないので、人が植えた
通りに森の形が決まる必要はありません。
どんな木がこの土地で勢力を広げるのか、
みんな興味しんしんです。

野ネズミが住むササやぶに面した所に、
ハンノキやイヌエンジュなど、「おいしく
ない」木を帯状に植える工夫をしました。
この「ネズミ防止帯」はけっこう役立って
いるようです。

草原にはクルミの若木が生えている一
帯がありました。エゾリスが種子を運んで
埋め、忘れたのでしょうか。ここはクル
ミ平と名付け、そのまま保護すること
にしました。

3年目 苗木の奮闘をデータにする

植栽の2年目、植え方をゾーン型に



本気の樹木調査で
色んな発見が。

変えてみました。メンバーが木に詳しくなり、「紅葉を見たい」「歩道近くは低く、奥は背の高い木を」と、景観を意識するようになったのです。ゾーンの性格を決め、それぞれ数種類を混ぜて植えました。

「自然に戻す森を、自分たちが勝手に決めていいんだろうか」と悩む声もありました。しかし、「将来、子や孫が『おばあちゃんが作った森だよ』と来てくれるなら、少しは思いを残そうと、『森のデザイン』が膨らみ始めたのです。環境の力と人の力のコラボレーションです。

ここは豪雪地帯で、苗木は雪にへし折られ、

春先にはシカやウサギにかじられます。苗木のダメージと成長を1本ずつ測り、表にまとめました。すると小さくて枯れ木が多いマカバが、実は成長率は高いとか、枝折れの多いカツラが生存率はいいいとか、意外な傾向が浮かび上がりました。「これは面白い」。植えることと、育てることがつながってきました。

4年目の2015年
森と木のイメージが
ふくらんできた

春の植樹祭。ワークショップのメンバーは大活躍でした。札幌からのバスの中で、「ど



もっと深く、寒しく
森づくり。

当別町青山の「道民の森神居居地区」にある。コブさっぽろは2008年から「Aゾーン」で植樹を行い、2013年からFゾーン(Fの森)に移った。Fの森は、2012年からワークショップメンバーを募り、「人と自然のコラボレーション」「森をデザインする」をコンセプトに森林復元活動を行っている。面積は7ha。他地区に比べ地形が複雑で、丘や湿地、沢や樹林帯などが含まれている。左はFの森全図。

んな森を目指して、なぜこの木々を植えるのか」を参加者に丁寧に説明します。現地では、穴の掘り方、根の踏み方を手ほどき。ただ植える作業ではない、自分たちの森を知って、一緒に育ててほしい、という思いがこもります。

苗木の計測調査も続けています。1年に1mも伸びた木があれば、数が減っている種類もあります。心配ですが、それもまた自然の営みです。

オオイタドリやオオワダチソウが苗木に覆いかぶさる場所もあります。力を合わせて抜いたら、根は何十センチもありました。「すごいね」「頑張ってるね」。雑草といえども、ここで確かに生きています。でもやはり、苗木に育ってほしい。ちょっと複雑な思いのまま、抜き取り作戦を相談しています。今年は植樹祭に続き、秋の育樹祭もありますよ。(文：山本牧)

asumori-report

森づくりを「楽しく」進めるために私たちができることは

メンバーは、講師とともに何度も何度もこの計画地や周辺を歩き、場所ごとの特徴、水分環境、既に生えてきている木々や草花を観察し、比較していきます。その過程で、それぞれの場所に生えたがっている木について感じ、イメージが少しずつ湧いてきます。歩きながら、場所に名前を付け、想いをめぐらすことで、ここが好きになり、木々の季節ごとの素敵さを知ること、「こういう時期に誰々と来た時に、こんな花が咲いていて、道を見ながら歩けるといいな」とか「この辺りで食べられるものが採れたら楽しいよね」と仲間たちで盛り上がるようになっていきます。「自然に森に遇っていくことを手助けしながら、その範囲で自分たちの望む森にするために知恵を絞ることで、その森をより好きになっていく」という森づくりをしています。メンバーは「単に何を何本植えて育てて、数十年後

にこんな森を」ではなく、楽しんでいる自分と仲間の姿が入った森づくりをイメージしています。

森の時間に比べたら私たちの人生は短いもので、関わるができる時間はごく僅かです。その僅かな関わりの中で、森ができる時間の凄さや素晴らしさを学び、それに逆らわずに手を少しかけ、愛を注ぎ、夢を見る活動に関われることの素敵さを味わっているメンバーの姿はイキイキとしたもので、私たちも嬉しくなります。他に例のない森づくりは今後素晴らしい先例となっていくことと思います。自然再生や森づくりの技術開発や実施を手掛ける雪印種苗(株)が関わることで、より技術的な裏付けができるとともに、応用可能な技術として普及していく可能性が広く開かれていることが、この類稀なる森づくりの面白さのひとつとなっています。



ワークショップ講師
鈴木 玲
手稲さと川探検隊

森をつくる人づくり ～Fの森のものがたり～

**森を育て、人を育てる。
「Fの森」に携わった
それぞれの立場の参加者には、
それぞれの気づきがありました。**

「みんなで森づくりを考え、みんなでやる」。市民による市民の森づくりは、他では見られない先進的なスタイルの森づくりです。それだけに難しい局面があったり、予想もしなかった発見があったり、新しい気づきがあったりします。そんな森づくりだからこそ、参加者だけでなく、講師や運営側にも学びをもたらしています。「Fの森」という場合は、森が育っていくだけでなく、関わる私たちを、それぞれの視点から育てています。

森と人が共に育つ。そんな素敵な森づくりが、「Fの森」の森づくりなのです。

ワークショップ講師
木村 浩二
雪印種苗(株)



Fの森ワークショップの 運営・実施に関わって

知識や経験は時には押し付けになってしまう場合があります。シンプルに、見たことや感じたこと、楽しかったことを自分以外の人にも伝えたい！という想いを大切にしています。この土地はどんなところか、植えた木がどうなって、どう変化をしているのか、通えば通うほど判らないことが増えていき、それが少しずつ判っていき、森づくりの手助けにつながっていきます。

雪印種苗での日常業務では、自然復元を目標として、その地の樹や野の花のタネを集め、苗づくりなどを多く手掛けています。いずれは種から育てる「楽しさ」も、ワークショップで感じてもらえる機会を作りたいと思っています。まだまだ試行錯誤が多いと思いますが、今後の市民の森づくりのお手本となるような活動になっていくといいな、と思います。



ワークショップメンバー
花岡 雪枝

あすもりの森づくりに 参加してみえたことは

森づくりはベランダで植物を育てるのと違い、長い年月と情熱が必要。育樹の勉強会を通し、小さな樹たちがシカにかじられ、虫穴だらけの葉になりながらも新たな幹を出し、一生懸命育つ姿に、愛しさが湧きました。

樹の成長を妨げる雑草を最初は憎き対象と引き抜くも、その立派な根の姿に尊敬の念も覚えました。ただ邪魔者を削除するだけではなく、自然と樹そのものを理解する広い視野と深い知識も必要…全てが子育てに通じているようです。



ワークショップの成果を植樹祭の楽しみにつなげています

Fの森の植樹祭では、参加者全員に「Fの森の地図」をお渡します。なぜならこれまでワークショップメンバー自らの足で歩きデザインしてきた森をみなさんに伝えたいから…ドカンがあったから『ドカン橋』、ヒバリが鳴いていたから『ヒバリーヒルズ』など。人から人へ伝わり笑みがあふれ人が集う。植栽木調査や育樹作業を通して森と人が共に育ち未来へつなげたいと心から思える、そんな森づくりがここにあります。



コープ未来の森づくり基金事務局
河村 直子
コープさっぽろ

■2013年度植樹エリア



■2014年度植樹エリア



ワークショップ講師
棚橋 生子
北海道立総合研究機構/
森林研究本部・林業試験場

研究者と市民メンバーが いっしょに調査に取り組んでいます

Fの森では、ワークショップメンバーが決めた多様な樹種を様々な面積・形で植えています。こういった他であまり例のない森づくりがどう推移するのか興味深く、植栽後1、2年目の樹高、雪による折れ、動物の食害を調べました。その結果、ケヤマハンノキ等の初期成長が良い樹種は樹高成長がよく、花や紅葉が美しい(好んで植えられる)樹種は、植えた時より小さくなっているものも多くみられました。また、その原因が、雪害や動物食害等樹種により異なることも分かりました。

これらの結果をワークショップでお話したところ、興味を持っていただき、ワークショップで調査を行うことになりました。樹木の調査は初めての参加者に、測定や記録の方法を説明し、調査を進めます。「どう教えれば?」と、スタッフ側も試行錯誤でしたが、参加者のみなさんも「どこ測るの?」等、疑問の連続で大変だったことでしょう。それでも、「調査の実施により植えた樹木をじっくり見ることができ、その変化が実感できて良かった。」等前向きな感想もあり、非常にうれしく思いました。また、調査結果がすぐに役立つのも貴重な経験です。これからも植えた樹木の成長を一緒に見ていきましょう。

■2015年度植樹エリア



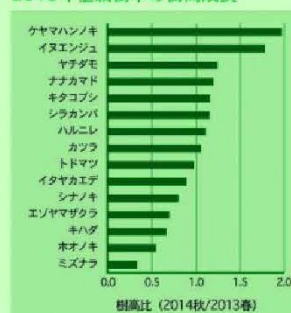
2015 Fの森 植樹樹種

エリア	エリアの面積	樹種名	本数
A	138	エゾノコリゴ	30
		マユミ	30
		コヤマユミ	30
		タニクワギ	48
B	217	ウダイカンバ	50
		ミズナラ	117
		ハルニレ	50
C	221	トドマツ	70
		ウダイカンバ	30
		シラカンバ	50
		エゾヤマザクラ	40
		ミズナラ	31
D	190	ケハダ	45
		コシアブラ	50
		ナナカマド	45
		エゾヤマザクラ	50
E	79	コシアブラ	14
		オシロイ	50
		クサハル	15
F	155	ハルニレ	40
		カヅラ	60
		イタヤカエデ	40
		ケハダ	15
		合計	1,000

みんなの
調査データ
がカタチに



2013年植栽樹木の樹高成長



※小苗植栽のウダイカンバの樹高比率は5.5

資料 5-基調講演資料 2

復興のランドスケープ

地域間交流による海浜植生復元への試み ～「北の里浜 花のかけはしネットワーク」の始動～

Establish of the Networks between Tohoku and Other Region Communities for the Restoration of Coastal Vegetation - Start-up of “Kita no Satohama, Hana no Kakehashi Network” Project

鈴木 玲* 松島 肇** 溝渕 清彦*** 孫田 敏****

Akira SUZUKI Hajime MATSUSHIMA Kiyohiko MIZOBUCHI Satoshi SONDA

1. 壊滅しなかった海辺の植物と人々の想い

2011 年 3 月 11 日に起こった未曾有の大震災は東北を中心とした太平洋沿岸に甚大な影響を及ぼした。直後に訪れた被災地では、家も木も流され、更地となった荒涼とした土地が広がっていた。しかし、海岸へ行くと、多くの松林が折れたり倒れたり立ち枯れている中で、ハマヒルガオが何事もなかったかのように静かに、しかも力強く花を咲かせている様子に、海辺で生きる生命の強さを感じ勇気づけられた。1 年後、現地で復興を目指す地域の方々や生態系の保全・復元に奔走されている方々にお会いし、彼らが抱える深い悲しみとそれにも勝る強さを感じた。皆、海辺の自然とともに暮らし、それらを大切に思い、元の自然が戻ることを願い、活動していた。海辺で暮らす人々の中にハマヒルガオを見た思いでした。

2. 再び危機に瀕している海浜植生

それから 3 年、なかなか思うように進まない復興事業に対し、復旧事業は仙台北海岸から防潮堤と海岸線の復旧工事が急ピッチで進んでいる。十分なアセスもないまま進められるこれらの大規模造成により、少しずつ回復してきた海辺の生態系が再び失われてきている。ハマヒルガオのような海浜植物群落は適度な攪乱・環境圧により成立する群落であるが、その生育適地は防潮堤と海岸林盛土により奪われてしまった。防潮堤の背後（陸側）では

環境が安定してしまい、また盛土を山土により行っているため海浜植物の生育基盤である砂丘未熟土も失われてしまった。チップマルチングをしているとはいえ帰化種に覆われるのは時間の問題だと考えられる。防潮堤の前面（海側）では（特に砂浜の狭い箇所においては）海水の影響を受けすぎて、これも定着には厳しすぎる環境である。

日本には自然状態の砂浜海岸は総延長の 10%程度であるのが現状で、海浜植物群落の発達した砂浜海岸はごくわずかである。海浜植物群落や高山性植物群落からなる自然草原の残存面積が国土の 2%に満たないことからその希少性が分かる。海浜植物群落は様々な恩恵（生態系サービス）を提供してくれる。例えば、移動する砂を留め、砂丘の形成を促進し、自然堤防を形成してくれる。防潮堤のない北海道石狩海岸では、江線から 250m の範囲に 2 つの大きな砂丘列があるが、海側の第一砂丘の高さは 4～6 m、ひとつ陸側の第二砂丘の高さは 8～12 mにもなっている。またセリ科のハマボウフウは、昔から海岸地域の食材でもあり、数少ない海浜性の動物を育む生態系を支えている。さらに砂丘は淡水を涵養することから、古くから砂浜には井戸が掘られ名水として利用されてきた。オランダでは砂丘水として水道水に利用しているそうである¹⁾。砂浜を覆う植物群落は内陸への飛砂を防止し、海岸線の形成を助け、更に内陸の農地や住宅地への潮や風の緩和に役立つ

ている。そして更に重要なことは、高波などで破壊されても回復するということである。まさに恒久的なレジリエンスと言える。このような貴重かつ重要な海浜植生が、次々失われているのが復旧事業のひとつの側面でもある。

3. 北海道からできること

このような状況に対して、異を唱える現地の方々には少なくない。防潮堤計画についての議論が活発になされている地域もあり、海辺の自然も活かした復興を求める声も聞かれる。しかしながら、現地では海浜植物の保護にまで労力を十分に割けないのが現状である。時間も人も場所も足りないのである。そんな中、北海道に住む私たちに何ができるだろうか。そう考えて周りを見渡すと、同じように「何かしたい」ものの、継続的支援が難しいことから二の足を踏んでいる人々が多数いることに気づいた。さらに、北海道には全国的にも珍しい、海浜植物の保護増殖に取り組んできた石狩海浜植物保護センター（石狩市）や自生種の増殖技術をもつ雪印種苗株式会社（札幌市）があり、東北に不足している様々な資源があった。

4. 「かけはし」として目指すこと

私たちは、海浜植物を通して東北の人々と北海道の人々をつなぐ「かけはし」になりたいと考え、「北の里浜 花のかけはしネットワーク（通称：はまひるがおネット）」を立ち上げた。復旧工事により消失する東北の海浜植物群落から今ある海浜植物の種子を集めて、北海道で育苗し、再び現地の適地あるいは近隣小学校等に移植することを目的とする。あの日生き残った植物たちを守り、被災地の復興への希望の光を絶やさないようにしていきたいと思う。そして、海浜植物群落の回復がハチやバッタなど元の生態系の回復につながり、その恵みを受けていた海辺の文化の保全・再生につながることを目指したい。



写真-1 被災後の浜で咲くハマヒルガオ
撮影：平吹喜彦氏



写真-2 進む防災工事

*雪印種苗(株)環境緑化部 **北海道大学大学院農学研究院 ***北の里浜花のかけはしネットワーク ****(株)アークス

5. 遺伝子攪乱防止への配慮

海浜植物には海流散布を行うものが多いことから、地域性にはあまりナーバスになる必要はないかもしれないが、確証がない以上、種子の移動は本来、行わないほうが望ましいと思う。しかし、前述のとおり東北での育苗等が困難な状況であるため、以下の原則にもとづき北海道で育苗することとした。

- ・育苗は石狩海浜植物保護センターや雪印種苗等に限定し、種苗の逸失や雑草の混入が起らないようにする。また花粉が広がらないよう、開花前に現地に移動させるか、間に合わない場合は花芽を除去する。
- ・育てた苗を植える場所は、種子の採取地周辺に限定する。
- ・種子の履歴をきちんと残し、北海道を含め他地域に拡散させない。
- ・育苗から植栽へとつなげていく。
- ・自宅で栽培したいという方に対しては、海浜植物保護センターにて配布している石狩浜の種子を記念に持って帰ってもらう。

6. キックオフ・フォーラムを開催

このプロジェクトをスタートさせるにあたり、被災地で活動されている方々の生の声を北海道に届け、プロジェクトの趣旨に対する理解を深めるとともに賛同者を集めることを目的として、2014 年 3 月 5 日（水）キックオフ・フォーラムを札幌にて開催した。フォーラムでは現地で復興を目指す「三陸ひとつなぎ自然学校」（釜石市）の伊藤聡代表、「ゆりりん愛護会」（名取市）の大橋信彦代表、「わたりグリーンベルトプロジェクト」（亶理町）の松島宏佑事務局長、それと海辺のエコトーンを守るために奔走していた平吹喜彦東北学院大学教授を招き、被災地の状況・求め



写真-3 キックオフフォーラムを開催

ている支援について説明してもらった。

フォーラムには 50 名以上が参加。多くの方から「被災海岸の自然を回復させる手伝いをしたい」「むしろこのことを通して現地の方々から学ぶべき」「自分たちのスキルが役に立つなら何でもする」などの熱い想いやエールも飛び交い、「3 年経って支援してもらいたいことはまだまだあるが、これからは支援というより学び合いましょう」という東北からの提言に共感して、スタートを切った。本フォーラムでは講演者の交通費等開催に係る経費を、Ready For? というクラウドファンディングサービスにより行い、約 70 名の方々から支援をいただき開催することが出来た²⁾。

7. 実際の活動へ

プロジェクト立ち上げに先立って 2013 年の秋に、仙台海岸と釜石で海浜植物（ハマヒルガオ、ウンラン、ハマニガナ、ケカモノハシ、ハマボウフウ、コウボウシバ等）の種子を採取した。これらの種子は一部は採り播きし、残りは冷蔵保存しておいた。

いよいよ遅い春を迎えた北海道でネットワークの協力団体とともに育苗をスタートさせるべく播種を始めている。5 月 18 日（日）に市民団体「手稲さと川探検隊」との活動を皮切りに、5 月 19 日（月）には市民団体「いしかり海辺ファンクラブ」と石狩海浜植物保護センター、そして 5 月 22 日（木）には雪印種苗株式会社にて簡単な勉強会の後、ビニールポットや育苗箱に播種した。今後も市民団体「リバーネット 21 ながぬま」や石狩市内の中学校での播種が予定されている。

育苗箱で発芽した苗は、夏にはポットに皆で植え替えて育て、その中で十分に生育して



写真-4 石狩でのタネ播き

現地植栽が可能なものから 1,000 株程度を、この秋に現地に北海道から持って行って、被災地の方々とともに植栽し、交流したいと考えている。そしてこの活動は、助成制度やクラウドファンディングによる資金調達も活用し、北海道と東北を結んで今後 3 年一区切りとして続けていくことにしている。

今回のような被害規模の大きな災害後の防災工事においては、本来全体のグランドデザインを決め、その際には失ってはならない自然環境をも考慮しながら進める必要がある。防災施設の配置は全体計画の中で位置づける必要があるが、うまくいっているとは言いがたい状況である。防災事業の中であまり顧みられていない海浜植物の保全を、市民が広域ネットワークで行なうことで、今後の復旧工事や東南海地震対策などで行なわれる海岸防災事業においても、考慮されるきっかけになれば幸いである。

8. おわりに

被災地では、次第に国民の関心が薄れていくことに強い危機感を抱いている。私たちが住む北海道でも遠い記憶となりつつあるのを感じている。この取り組みが支援を超えた交流に発展し、双方の市民団体や小学校での苗づくりによる交流なども行っていききたいと考えている。苗づくりと植栽などは時間をかけて行う大切な環境教育であり、またそのことを通して継続的な防災教育へとつながり、いつ起こるか予測不能な災害への備えとなるはずである。このような取り組みを経て、海浜生態系の修復だけでなく、壊滅的・致命的な被害に対する人と自然のレジリエンスを高める手法を検討し、今後の海辺の地域づくりに生かすモデルの構築を目指している。

補注及び参考文献

- 1) ミツカン水の文化センター編（2005）：砂丘はオランダの恵み：水の文化（19），24-25
- 2) クラウドファンディングプロジェクト「東日本大震災で被災した海浜で植生の回復に取り組みたい！」
<https://readyfor.jp/projects/satohama>

北の里浜 花のかけはしネットワーク はまひろがおネット

津波被災海岸の もともとの海浜植生を
東北-北海道のネットワークの力で取り戻そう

震災により防潮堤は壊れ、海岸林は倒れましたが、それを癒やすように海浜植物は広がり、3 カ月後の 6 月にぼ花を咲かせた群落を、さまざまな地区で見かけるまでになりました。

しかし残念ながら、一般に認知度が低く、保護の対象にもなりにくいいため、今まさに、復旧工事による造成・盛土によって再び、その生命が失われようとしています。

それをどうにかしたいという思いを持つ仲間が、東北にも北海道にもいました。

そして、今ある東北の海浜植物の種子を集めて、北海道や周辺地域で回復に向けて苗づくりを行い、再び現地で植える「北の里浜 花のかけはしネットワーク(はまひろがおネット)」を立ち上げました。



一緒にプロジェクトを進めませんか?
ただいま、クラウドファンディング
ReadyFor? で、支援募集中!

目的

- ・東日本大震災で津波被害を受けた海浜の植生回復を皆で行ない、自然とともにあった地域の文化と自然を次世代に残す
- ・被災地と周辺地域の継続的な交流を進め、防災・減災の学びを共有していく



活動は各地で始まっています



ハマボウフウの苗づくり (釜石)



仮設住宅での海浜植物植栽 (名取)



海浜植物のレスキュー (仙台)

北の里浜 花のかけはしネットワーク (はまひろがおネット)



三陸ひとつなぎ自然学校 (釜石)
ゆりりん愛護会 (名取)
わたりグリーンベルトプロジェクト (巨理)
緑を守り育てる宮城県連絡会議 (仙台)
南蒲生 / 砂浜海岸エコトーンモニタリングネットワーク
環境省東北環境パートナーシップ・オフィス
東北学院大学教養学部 平吹善彦教授

いしかり海辺ファンクラブ (石狩)
石狩市海浜植物保護センター (石狩)
花のかけはしネット (札幌)
手稲さと川探検隊 (札幌)
雪印産苗株式会社 (札幌)
環境省北海道環境パートナーシップ・オフィス
北海道大学農学研究科 松島肇講師

津波で失われた海岸の生きものと人々の暮らし



甦ってきた海浜植物たち

わずかながら生き残った海浜植物たちが、壊されたコンクリートの隙間や松林の中で遅く育ち、少しずつ広がってきていました。



種子から発芽も...



ハマヒルガオ



ハマエンドウ



ウツラン



ハマナス



結実するハマボウフウ

防災工事によって再び消滅の危機・・・

仙台海岸空撮



海岸林盛土
防潮堤

再び繁茂し始めた植物たちの生息環境が、再び壊されてしまっています。



防潮堤工事



海岸林盛土工事

砂浜～海浜植物群落～海岸林～後背湿地という連続的で多様な生態系がありました

<ネットワークでの はじめの活動> タネは 2013 年秋に現地で採取しました

北海道で 苗を育てて



育苗箱にタネ播き

2014 年 4 月 タネ播き



ポットに植え替え

2014 年 6 月 苗のポット上げ

東北の海岸で 一緒に植えます

みんなで植え込み



2014 年 9 月～ 植栽・交流

資料 7-グループディスカッション資料

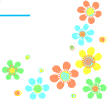
環境カウンセラー活動を
よりよく進めるために

 **グループで
意見交換しましょう！**

 **ワールドカフェとは？**

- カフェのような
リラックスした雰囲気の中で
テーマに集中して話し合います
- 『議論』ではなく『対話』

 **今日の流れ**

1ラウンド
↓
2ラウンド
↓
3ラウンド
↓
ふりかえり・まとめ

席替え ←

 **カフェエチケット**

- ① お話は短く、簡潔に！
じっくり耳を傾けましょう
- ② 話したことやイラストをかい
て話題を広げたり深めたりしましょう！
- ③ テーマを意識して
お話を楽しみましょう！

 **カフェエチケット**



 **第1ラウンド**

今日の講演を聞いて
あなたが思ったことや
気づいたことは、
どんなことですか？



第2ラウンド

テーブルに残る人を
一人決めましょう！



7

第2ラウンド

他のテーブルに
移動しましょう！



8

第2ラウンド

講演や第1ラウンドを経て
あなたが気づいたことや
考えたことは、
どんなことですか？



9

第2ラウンド

他のテーブルに
移動しましょう！



10

第3ラウンド

今日、考えたことや学んだことを
今後の環境カウンセラーの
活動にどのように生かして
いきますか？



11

ハーベスト

- 感じたこと・気づいたこと
- 印象に残ったこと
- 大事だと思ったこと・言葉
- 他の人に伝えたいと思ったこと
- ・ 付せん一枚に一つのこと
- ・ 何枚書いても構いません

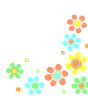


12



ハーベスト

一番、共感できる
付せんをひとつ
選んでください

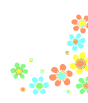


13



ハーベスト

選んだものについて
グループで意見を
交換しましょう！



14



話し合いの時間は
これで終了です。
ありがとうございました！



15

登録部門	(いずれかに○を付けて下さい) 市民 事業者 両部門
登録年度	(登録番号の左4ケタをご記入ください(登録年度)) 年度

1. 今回の研修を受講した目的は何ですか。最も当てはまるものを1つだけ選び、○印を付けてください。

ア. 環境カウンセラーとしてのスキルアップのため

イ. 環境問題に関する最新情報を入手するため

ウ. 環境カウンセラー相互の情報交換を行うため

エ. 登録更新の要件（研修の修了）を満たすため

オ. その他（ ）

i) 午前の部 基調講演 「自然・人がきずなで繋がる里浜復興」

- ① 活動に得るものがありましたか
(得るものがあった ・ 普通 ・ 得るものはあまりなかった)
- ② 時間について
(長かった ・ 普通 ・ 短かった)
- ③ 講演内容はカウンセラー業務の参考になりましたか
(十分参考になった ・ 普通 ・ あまり参考にならなかった)

60

iii) 午後の部 グループディスカッション

- ① 時間について (長かった ・ 普通 ・ 短かった)
 ② 進行について (良かった ・ 普通 ・ 良くなかった)
 ③ ディスカッションについて (来年もしたい ・ 別のことをしたい)

※午後の部の感想があればお願いします。

3. 開催時期、開催日について、ご希望があればご記入ください。

例：開催時期は12月、開催日は平日が良いなど・・・

- #### 4. 研修の形式について

ア. 本年度と同じような形式でよい
イ. 実施形式を変えてほしい

具体的には（ ）

5. 次年度の研修において、講義で希望するテーマや講師、実施してほしいテーマ等がございましたら、その理由も合わせてご記入ください。

--

6. その他、研修全体についてご意見等ありましたらご記入ください。

--

ご協力ありがとうございました。アンケートは、お帰りの際に回収箱まで
ご提出をお願いします。

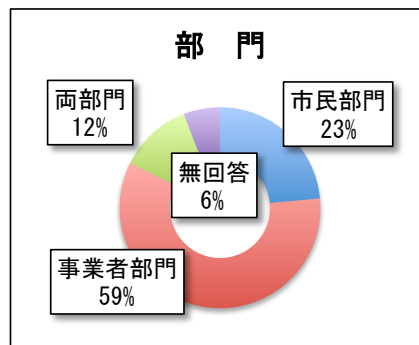
資料 9-アンケート集計結果

平成 27 年度北海道地区環境カウンセラー研修アンケート結果

平成 27 年度の研修の参加者について、32 名であった（一般参加者を含む）。このうち、環境カウンセラーとして受講された方は 19 名であった。この 19 名の受講者のうち、アンケートを記入されたのは、17 名であった。（回収率は、89%（前年度は 86.7%）。

なお、道外より 1 名の参加があった。（三重県）他は全て北海道在住の方である。

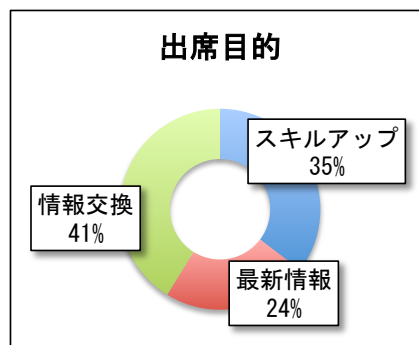
本年度の参加者を部門別に見てみると、右の図のとおり、事業者部門が全体の 6 割である。昨年度に比べ市民部門の参加が減少している。（昨年 は 3 割）



1. 参加目的について

参加者の目的については、右図のとおり、「情報交換」「スキルアップ」が多く、両者で全体の 8 割弱となっている。（前年度は、「情報交換」「スキルアップ」「最新情報の収集」で全体の 8 割弱）

これは、昨年 2 割程度を占めた「更新要件」による出席が、今年度はなかったことによる。また、「情報交換」を目的とした参加が、昨年の約 2 割から倍増していることは、特徴的である。

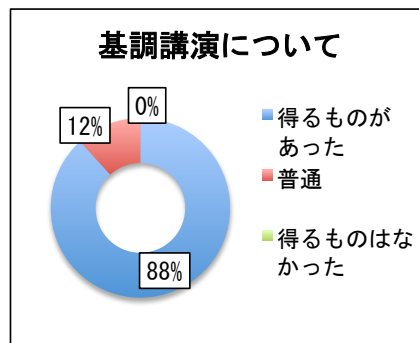


2. 研修プログラムについて

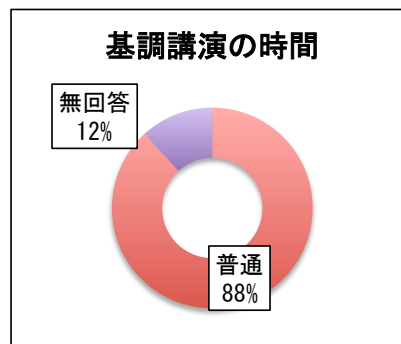
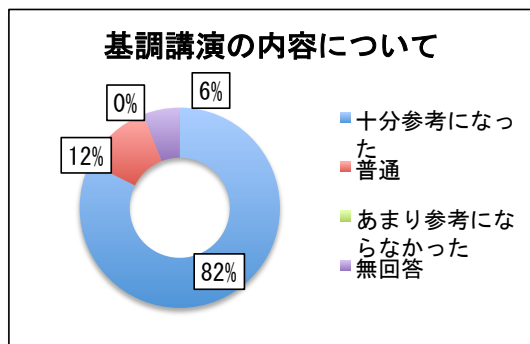
i) 基調講演『「自然・人がきずなで繋がる浜里復興」への道のり』については、約 9 割の方が、「得るものがあった」と回答されている。（前年度 7 割強）

講演時間については、「長い」や「短い」と回答された方はおらず、「普通」という意見が 9 割近くを占めたことから、適切であったと考えられる。

講演の内容は、「十分参考になった」と回答されている方が 8 割を超えていることから、



こちらも適切であったと考えられる。(昨年は 6 割、一昨年は 7 割)



基調講演への感想としても、「とても刺激を受けた内容でした。ありがとうございます。」
 「多くの人との連携、やろうと思ったことはやる行動力、種の保存について学んだ。」「環境支援教育など長期的に続けることが重要。」「講師の信念を強く感ずるとともに、人とのつながりや協働がいかに大切であるかを学んだ。」「たいへんよかった。」など、適切な内容であったことがうかがえる記述が多く見られた。

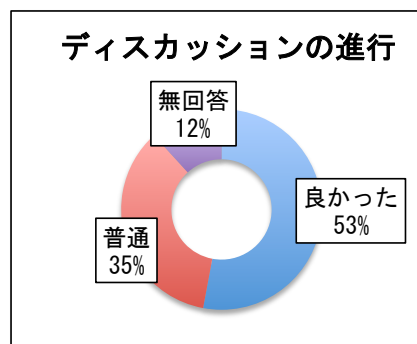
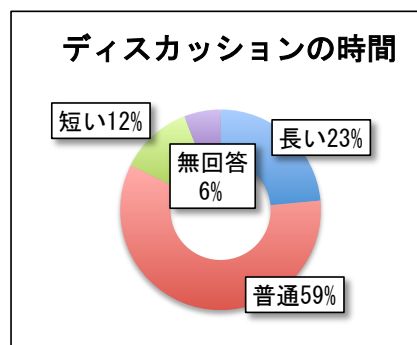
ii) 本年度のグループディスカッションは、従来、2 名の事例発表の時間をとっていたものを、グループの中で、参加者それぞれの事例を交流するスタイルとしたため、3 時間半という長時間のものとなった。その結果、「長い」が 23%、「短い」が 12%で、「普通」と回答した方は約 6 割であった。(昨年は、「普通」が 9 割)

進行については、「良かった」が 53%、「普通」が 35%で、「良くなかった」との回答はなかった。

具体的な感想としては、内容について、「相互交流が図れてよかった。」「環境カウンセラーとしての環境対策など深めることができた。」と評価する回答があった。また、時間について、「今年はグループディスカッションに十分な時間がありよかった。」

「ワールドカフェの時間が長く十分な話し合いができた。」「今年は人数が少ないこともあり、また時間も十分にとられて、区切りをつけて話し合うことができ、とてもよかった。時間がとれていると話の

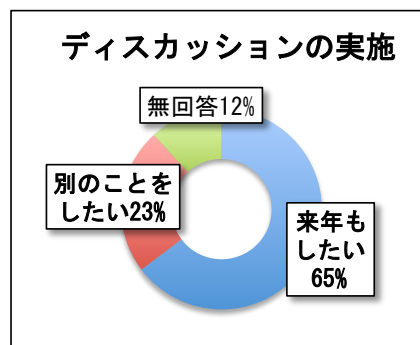
広がりがあった。」と評価する声がある一方、「長かった。」「時間が長かったので疲れた。」という声もあった。さらに、進行については、「人数が適当。スムーズな進行がよかった。」と



評価する声があった。

来年度も同様の開催を望む回答は 65%、別の内容を希望する回答は 2 割となっている。希望するスタイルとして、具体的には、「できればテーマを決めて結論を出すディスカッションをしたい。」今回はワールドカフェ形式で、ラウンドを 3 回行ったことに対して、「ラウンド回数は 2 回くらいで（1 回の）時間を長くした方がいい。」「環境カウンセラーの活動報告なども取り入れてはいかがなものでしょうか。たとえば、今回 JICA（南米）で活動されている人がいました。聞いてみたかったです。他にもいろいろ活動されている方がいるかと思います。」などの提案があった。

今回は、特定の事例発表者を立てることなく、グループ内で、それぞれの取組を交流するように企画したものであるが、その趣旨が参加者には十分に伝わっていなかったことが反省点である。



3. 研修の実施時期について

研修の実施時期についての回答は、9 件あった。時期については、「今回の開催日でよい」が 1 件、「10～11 月」「11 月」「11 月か 1 月」「11 月～12 月初旬」がそれぞれ 1 件、「12 月で良い」「12 月中旬まで」がそれぞれ 1 件、「交通障害のない時期を希望する」が 1 件となった。また、曜日の希望については、5 件の回答があり、「平日・休日どちらでも良い」が 1 件、「土曜日か日曜日」が 2 件、「土曜日」と「日曜日」がそれぞれ 1 件ずつであった。

4. 今後の研修形式について

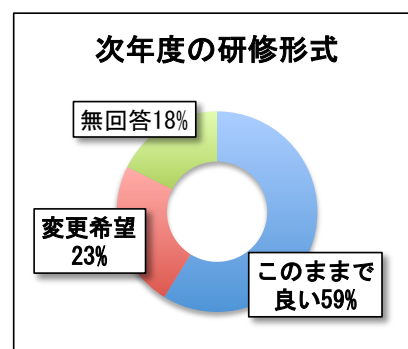
研修の方向性については、このままで良いが約 6 割、変更を希望する回答は、約 2 割となっている。

具体的な内容としては、「発表を多くする」「KJ 法」「実証活動など」「環境省の施策全般についての報告を入れる」が挙げられていた。

また、「午後の部では、午前と合わせて環境カウンセラーと一般の方々との交流を図ってどうでしょうか。」「大学生等も入れ、若者との共同研修もあってよいと思います。」というような、環境カウンセラー以外の主体の参加を提案する意見もあった。他には、「専門家 4～5 名のパネラーによる環境問題(教育)等討論での実施を検討。」という提案もあった。

希望するテーマや内容については、次のようなものが挙げられたが、「気候変動」関連の要望が多く挙げられている。

- ・生物多様性と企業の役割等 CSR や CSV に関する内容



- ・ 気候変動について適応策の内容について学びたい。(地域の)
- ・ 温暖化防止対策等で環境カウンセラーができること。
- ・ 地球温暖化問題についての講義
- ・ 再生エネルギー
- ・ 太陽光発電パネルの廃棄物の問題
- ・ 河川、ダムの意義 自然保護
- ・ COP21 を受けて日本の方向について

5. 研修への感想

[環境カウンセラー制度及び情報提供等について]

- ・ 環境省の施策や重点施策についての報告があってもよかった。(例年はプログラム中にあるが、今年はなかった。) 環境カウンセラー制度や登録状況については 5～10 分もあれば十分なので、20 分は必要ないのではないかと。環境省の施策と合わせて 30～40 分くらいがよいと思います。

[基調講演について]

- ・ これから少子高齢化に向かう中、自然体験プログラムは介護分野との協働も手掛けていくべきだなと実感しました。NPO 相互の連携によって、活動予算のやり取りができる仕組みがあればよいのですが・・・” 十数万円のお金の用意ができなくて断念”
- ・ 鈴木代表の生き様と環境保全活動がよく理解できた。以前あったような環境省の予算があれば、環境カウンセラー協会としてもやってみたい活動である。

[全体をとおして]

- ・ 今回の北海道での研修では、同一テーマで参加者が話し合えることは有意義でしたので、ぜひ来年度以降も実施してほしい。
- ・ 今年の参加者が少なかったのは、実施案内がなかったからでは？
- ・ 環境カウンセラー70名以上の登録者があるが、研修参加者が少なく、開催時期、テーマを早く周知することが必要か。
- ・ 環境カウンセラーの資格維持と研修を結びつけた形にし、研修を義務づける形にしたら出席率が上がるのではないかと。
- ・ 環境カウンセラー協会が中心となって環境カウンセラーのネットワークを構築する。
- ・ 皆さんが環境カウンセラーの存在意義について自問自答している様子を感じました。
- ・ 環境カウンセラー同士の活動報告を出し合うような場が必要。組織力強化のため、賛助会員（協力企業等のスポンサー）を設けてはどうか。講師に招いて賛助会員になってもらう、CSR 意識の高い大手企業など

資料 10-基調講演一般参加者アンケート

環境カウンセラー研修公開講演会アンケート

環境カウンセラー研修公開講演会にご参加いただき、誠にありがとうございました。
今後に向けての参考とするため、アンケートにご協力おねがいします。

1. お住まいの地域をお知らせ下さい。

札幌市 ☐ 北区 ☐ 東区 ☐ 中央区 ☐ 白石区 ☐ 厚別区
☐ 清田区 ☐ 豊平区 ☐ 南区 ☐ 手稲区 ☐ 西区
☐ 江別市 ☐ 石狩市 ☐ 小樽市 ☐ その他 ()

2. 年齢と性別をお知らせ下さい。

☐ 20 代以下 ☐ 30 代 ☐ 40 代 ☐ 50 代 ☐ 60 代 ☐ 70 代以上

☐ 女性 ☐ 男性

3. 講演会を何でお知りになりましたか？（いくつでも、おつけください。）

☐ チラシ ☐ ポスター ☐ 家族や友人に聞いた)
☐ ホームページ（具体的に)
☐ Facebook（具体的に)
メールニュース（☐ 北海道環境財団 ☐ その他)
☐ その他（具体的に)

4. 来場の動機をお知らせください。（いくつでも）

☐ 自然体験・環境教育・環境保全活動に関心があったため
☐ 震災復興に関する取組に関心があったため
☐ 地域のネットワーク形成に関心があったため
☐ 企業の環境保全活動・CSRに関心があったため
☐ 講師の鈴木玲さんのお話に関心があったため
☐ その他（具体的に)

5. 参加されて、いかがでしたか？

【内容】

発見や得ることが 5 4 3 2 1 発見や得ることは
たくさんあった | なかった

【時間】

短すぎた 5 4 3 2 1 長すぎた

6. 参加された感想をごお知らせ下さい。

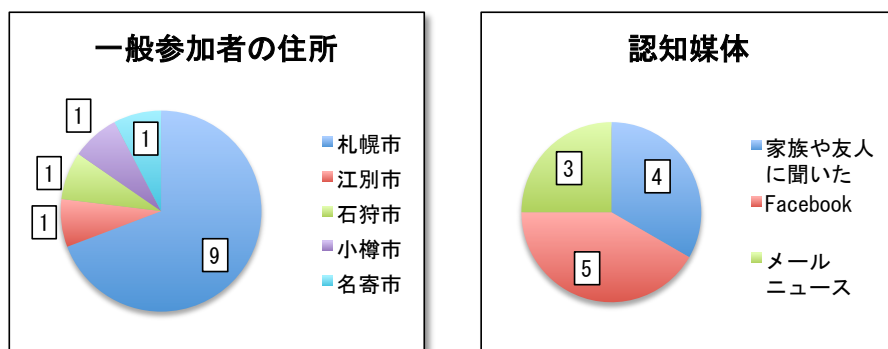
(ご協力、大変ありがとうございます。)

資料 1 1-基調講演一般参加者アンケート集計結果

平成 27 年度北海道地区環境カウンセラー研修
基調講演一般参加者アンケート結果

平成 27 年度の研修の基調講演一般参加者は 13 名で、すべての方からアンケートの提出があった。回収率は、100%である。

居住地別の参加者数は、下記の図のとおりで、石狩市、江別市、小樽市という札幌近郊の都市の他に、遠く名寄市からの参加もあった。一方、この講演を何で知ったかという問いへの回答は 12 件で、その内訳は「Facebook で知った」が 5 名、「家族や友人・知人に聞いた」が 4 名、メールニュースが 3 名であった。

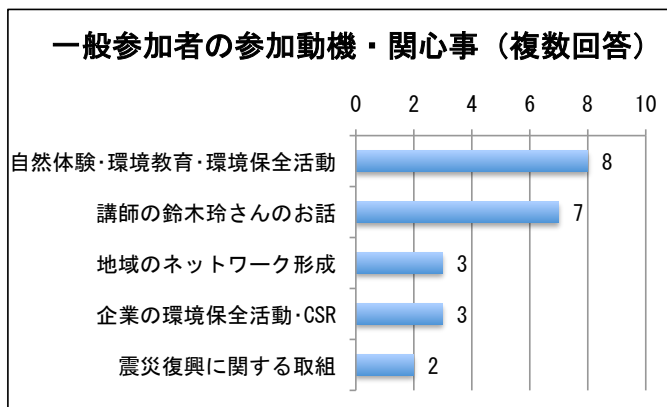


1. 来場動機について

一般参加者の来場動機について、次の 5 つから複数選択で回答していただいた。

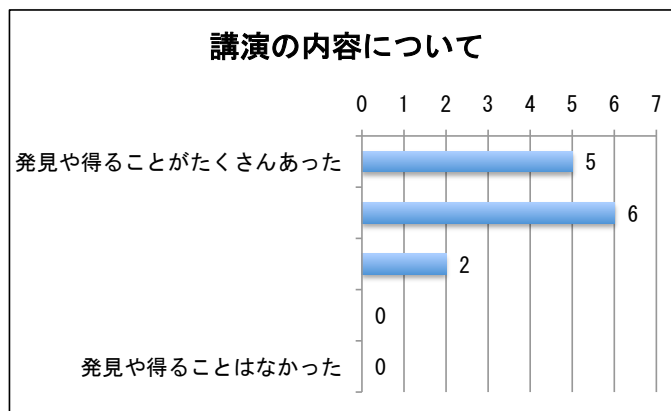
- ・自然体験・環境教育・環境保全活動に関心があったため
- ・震災復興に関する取組に関心があったため
- ・地域のネットワーク形成に関心があったため
- ・企業の環境保全活動・CSR に関心があったため
- ・講師の鈴木玲さんのお話に関心があったため

来場動機の上位 2 件は、「自然体験・環境教育・環境保全活動」(8 件)、「講師の鈴木玲さんのお話に関心があった」(7 件)であった。



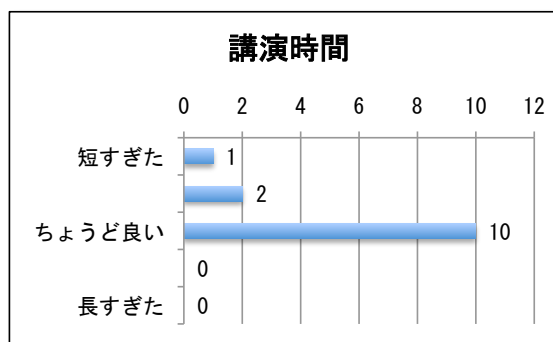
2. 講演の内容について

講演の内容について、「発見や得ることがたくさんあった」から「発見や得ることはなかった」までの5段階で尋ねた。評価の高い「5」と「4」と回答した方が 11 件で、全体の 85 % となった。



3. 講演時間について

講演時間について、「短すぎた」から「長すぎた」までの5段階で尋ねた。その結果、「ちょうど良い」にあたる「3段階目」の回答が 10 件、「やや短い」にあたる「2段階目」が 2 件、「短すぎた」にあたる「1段階目」が 1 件で、時間については、概ね適当であったと言える。



4. 基調講演への感想

- ・ 湿地・林の再生に興味がありました
- ・ 自然保護を目的として野の花を観察している会に属しています。この会は 35 年続いていて会員 43 名程度です。今後も続けていく予定ですが、環境カウンセラーという言葉は初めて知りました。
- ・ 自然環境を守る、又は(被災地のように)復旧させるには近隣の市町村(札幌市は海ないけど身近な海として石狩や小樽)の連携や協働も大事だなと、ふと思いました。
- ・ 結果を出すことも大切ですが、プロセス、過程の大切さを感じました。
- ・ 一般の人には難しいかな…?鈴木さんの話は分かりやすくおもしろかったです。
- ・ もっと違う世代を巻き込むには違うアプローチが・・・と思います。
- ・ 興味はあっても難しそうで、入り込めないと思います。
- ・ 自然環境の取組＝子ども達、学生さん等の取組＝環境の適正化が表現されてます。関心が高かった。(含、ネットワークの強化)

感心の理由＝現況、道内事業者の取組が「目先の金々」にこだわり、適正取組に欠けている現実。小樽商科大学の環境経済の講義に反している事業者CSRがダウン状況にあ

ります。講義内容は、悪貨は良貨を駆逐する危険な選択を防止する。(グレシャムの法則)

- ・ 今回、初めて参加して、いろいろ参考になりました。自分にできる事は??考えさせられました。ありがとうございます。

平成27年度環境省北海道地方環境事務所請負業務
平成27年度環境カウンセラー研修企画検討等業務実績報告書

2016年 2月

特定非営利活動法人 北海道環境カウンセラー協会

〒064-0919 札幌市中央区南19条西7丁目3-5-501

TEL 011-521-1244 FAX 011-521-1244

URL : <http://www.ec-hokkaido.com/>

リサイクル適正の表示：紙へリサイクル可

本冊子は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準に従い、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料のみを用いて作成しています。